

1. プログラム

平成 26 年度 日本/ユネスコパートナーシップ事業 ESD・ユネスコスクール研修会 岡山 2014

主催：文部科学省、岡山大学

共催：岡山市教育委員会

後援：岡山県教育委員会、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク

テーマ：学校間ネットワークを活用した ESD の推進

日時：平成 26 年 8 月 25 日（月）13:00～16:30

場所：岡山大学教育学部

プログラム：

13:00～13:10 開会式

13:10～14:40 実践報告

(1) 「地域や他校とのつながりを広げ、関わる ESD」

大牟田市立吉野小学校 教頭 荒木秀敏

(2) 「世界の中の一人として、社会を担い、未来を創造する資質の育成

——ESD 子どもみらい会議を通して——」

多摩市立多摩永山中学校 教諭 鈴木 萌

(3) 「アジアの高校生とともに学びあう ESD 実践

——高校生 ESD 国際シンポジウムの取り組みを例に——」

筑波大学附属坂戸高等学校 教諭 今野良祐

14:40～14:55 まとめ

14:55～15:10 移動・休憩

15:10～16:20 ワークショップ

(第 1 分科会) 小学校における学校間交流を含んだ ESD のカリキュラム作り

(第 2 分科会) 中学校における学校間交流を含んだ ESD のカリキュラム作り

(第 3 分科会) 高等学校における学校間交流を含んだ ESD のカリキュラム作り

2. 開会式

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

皆さんこんにちは。ただいまより平成26年度文部科学省「日本／ユネスコパートナーシップ事業 ESD・ユネスコスクール研修会2014岡山」を開催します。最初に、岡山大学の副学長であり、ユネスコスクール支援大学間ネットワークの事務局の責任者でもあります本学の阿部理事にご挨拶をいただきます。

○阿部宏史（岡山大学副学長、企画・総務担当理事）

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました岡山大学の企画・総務担当理事、副学長を務めております阿部でございます。大学を代表いたしまして、たくさんの方にご参加いただいたことに対しまして御礼を申し上げたいと思います。

今年には2005年から2014年の国連ESDの10年の最終年に当たりまして、岡山市と愛知県名古屋市でESDの10年を総括する「ESDに関するユネスコ世界会議」が開催されます。今日はユネスコスクールとESDに関する研修会ということでございますけれども、岡山市では11月6～8日に「ユネスコスクール世界大会」ということで、最終日の11月8日には岡山大学で「ユネスコスクール全国大会」が開催されることとなっています。我々、ここ数年間ESDに取り組んできた者としては、一つの区切りになる年かなと思っております。

先ほど、住野先生からご紹介いただいたユネスコスクール支援大学間ネットワークでございますけれども、文部科学省がユネスコスクールをESDの推進拠点と位置づけて、その振興を図っていただくということで、それを支えるために当時、全国の8大学が参加して結成いたしました。岡山大学はその創設からのメンバーになっております。現在では約17大学が参加しておりますが、オブザーバー参加も入れますと20近く大学の加わって全国的に地域の分担を決めながら、ユネスコスクールの加盟申請支援やESD活動の質的向上に向けた支援を行っているところであります。岡山県内を見ますと、2008年は、県内にユネスコスクールは高校2校しかなかったと思いますが、今は岡山市だけでも加盟

申請中を含めるとユネスコスクールは50校以上にのぼると聞いております。この数は、おそらく当時の日本全体のユネスコスクール加盟校数よりも多いのではないかと考えております。今年の4月現在の日本の加盟校は700校以上ということで、世界の中でもユネスコスクールが最も普及している、加盟校の多い国になっています。2014年がひとつの区切りとなりますが、これでE S Dやユネスコスクールの活用が終わりということではなくて、これからしっかりと質の向上に向けて振興を図っていかないといけないということでもあります。今日は短い時間ではありますけれども、他地域の先進的な事例について学んでいただき、その後、活発な議論が展開され、岡山地域、そして県外のユネスコスクールの振興につながっていくことを期待しております。

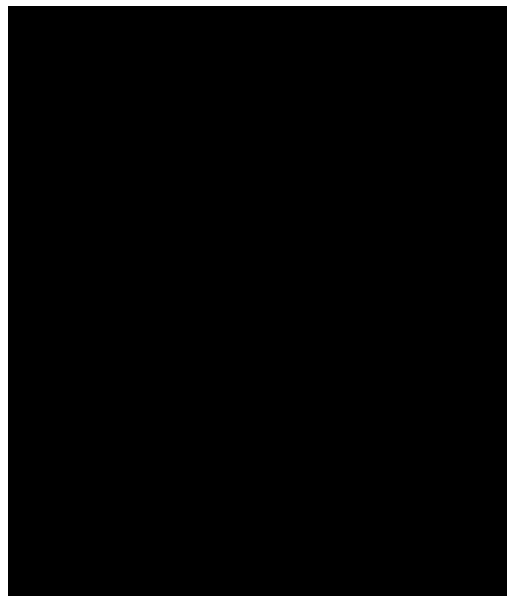
簡単でございますけれども、開会にあたりましての挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

阿部先生、ありがとうございました。それでは、続きまして、岡山大学大学院教育学研究科の高塚研究科長からご挨拶いただきます。

○高塚成信（岡山大学大学院教育学研究科）

失礼いたします。皆さんこんにちは。岡山大学大学院教育学研究科長の高塚でございます。本日は、お忙しい中、「E S D・ユネスコスクール研修会2014岡山」にご参加くださいまして誠にありがとうございます。午前に行われました岡山市教育委員会によります「平成26年度 第2回岡山市ユネスコスクール推進校連絡会研修会」から続けてご出席の方もおられるということで、長時間、ご苦勞さまでございます。皆様には、平素からユネスコスクールとしてE S Dの推進拠点となって実践に取り組みまれますことに対して、心から敬意を表したいと思います。



先週、広島市で豪雨によって甚大な土砂災害が発生いたしました。また、昨日、北海道礼文島でも土砂災害が発生しております。まずは、皆様とともにお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りす

るとともに、被害に遭われた方々へ心からお見舞いを申し上げたいと思います。

日本、あるいは中国では、豪雨による洪水や土砂災害が発生したり、アメリカ・カリフォルニアでは、500年に一度といわれる干ばつによって異常乾燥による山火事が発生するなど、自然環境における極端な気象状況が地球で顕著になっております。社会環境あるいは国際状況でも、イスラエルとパレスチナ、ウクライナとロシアなどでの衝突があり、日本も中国、韓国と領土問題などで対立をしております。今なお、世界中の多くの場所で衝突・内戦・対立が見られております。健康・安全面でも、西アフリカ諸国においてエボラ出血熱で1,400名以上の方が亡くなっており、より広い地域への拡大が懸念されているところであります。このような世界的なグローバルな問題ばかりではなく、地域社会におきましても日常的に凶悪犯罪が増加し、貧富の差は拡大するばかりという様々な問題が生じております。このように、持続発展を阻む要因が多数存在する状況の中で、E S D実践推進校としてのユネスコスクールは、学校教育と家庭教育及び社会教育とを結びつけるうえで、その重要性が増していることを認識しております。

学校においてE S Dの実践を進めるためには、学校全体で取り組むことが重要であります。課題解決のためには、学校独自での取り組みだけでは十分ではなく、地域内のみならず地域や国も越えてE S Dの実践を共有し、相互に学び合うことが不可欠だと思っております。本日、そのような学校間ネットワークを活用した先進的取り組みをしておられます3つの学校の先生方に講師として遠路お越しいただき、実践報告やワークショップをしていただけますことを、大変ありがたく思っております。この場をかりまして心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

本研修会が、E S Dを推進しておられるユネスコスクール学校間の交流ネットワークの形成・活用を促し、素晴らしいE S D実践が共有され、それぞれの学校におけるE S Dがますます推進される一助となることを、さらには、11月に岡山市で行われます「ユネスコスクール世界大会」「ユネスコスクール全国大会」の成功につながることを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。本日は、何卒よろしく願いいたします。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

高塚研究科長、ありがとうございました。なお、今日は午前中に引き続きまして、岡山市E S D世界会議推進局の浅井局長にも出席していただいております。ありがとうございます。浅井局長には、後ほど、岡山市で開催される「E S Dに関するユネスコ世界会議」につきましてご案内をいただくことになっております。

それでは早速、実践報告に移りたいと思います。最初に、環境教育をもとに多彩なストーリー性の

あるカリキュラムということで取り組んでいらっしゃいます大牟田市立吉野小学校の荒木秀敏教頭先生に実践報告をしていただきます。先生、よろしくお願いします。



3. 実践報告

(1) 「地域や他校とのつながりを広げ、関わるESD」 荒木秀敏（大牟田市立吉野小学校）

皆さんこんにちは。福岡県大牟田市立吉野小学校の荒木と申します。よろしくお願いたします。今から「地域や他校とのつながりを広げ、関わるESD」というテーマで、まず大牟田市のESDの取り組みについてお話し、後半は実践例としまして本校5年生の実践である「桜プロジェクト」という実践について発表させていただきます。

大牟田市は福岡県の最南端に位置し、人口約12万人の町です。西は有明海、東は阿蘇連山に連なる丘陵に囲まれた穏やかな自然に恵まれたところです。大牟田では15世紀に石炭が発見され、明治時代には我が国の産業革命の原動力として工業の近代化をリードしてきました。昭和30年代には、人口20万人を超える都市として栄えていましたが、石炭から石油へのエネルギー転換に伴い、平成9年には大牟田の三池炭鉱も閉山してしまったところです。こうした石炭関連の産業遺産が、世界文化遺産政府推薦案件として正式決定し、平成27年度の世界文化遺産の本登録を目指しています。また、日本最古の天正カルタに三池という文字があり、当時、三池は大牟田を指していたことから、大牟田市は日本のカルタ発祥の地として全国唯一の公設カルタ館があります。毎年夏には、市内に残る大蛇山伝説に基づく夏祭りがあり、大牟田の夏は盛り上がりを見せます。

大牟田市には21の小学校、11の中学校、1つの特別支援学校があり、約9,000人の子どもたちが学んでいます。大牟田市の現状は、少子・高齢化や新たなエネルギー産業の開発などの課題があり、これらの現状をいわゆる国際社会の縮図として捉え、本市では現在、持続可能な社会づくりを推進しているところです。

そこで、各学校では本市の現状を踏まえ、福祉学習・エネルギー学習・環境学習・世界遺産学習など、様々な特色ある教育活動を行っています。そして、平成23年度末に市内すべての小・中・特別支援学校がユネスコスクールに加盟し、「ユネスコスクールのまち大牟田」として実践を積んでいるところです。組織としましては、各学校の校務分掌にユネスコスクールの担当を位置づけ、大牟田市教育委員会のもとユネスコスクール担当者会を開き、定例会や研修会を通して情報交換等を行っています。

それではまず、本校5年生の「桜プロジェクト」という実践について、今からお話をしていきたいと思います。まず、昨年度の5年生が作成しました「桜プロジェクト」についてのPRビデオをご覧ください。

(ビデオ上映)

子どもたちは、桜を通してどのように地域とのつながり、また、かかわりを深めていくことができたのでしょうか。

吉野小学校は、大牟田市の北東部、稻荷山の麓の豊かな自然の地域にあります。一方で、九州新幹線の開通とともに道路の整備や住宅の建設が進められ、地域の環境も変わっていかようとしています。そこで、吉野小学校では住みよい吉野の町になるように、子どもたちが自分たちにできることは何かという視点からESDに取り組んでいるところです。

本校では、研究主題を「持続可能な社会づくりについて自分の考えを持ち、行動する児童の育成」とし、現在、「国際理解」「エネルギー環境」「生命(いのち)」の3つのテーマで、学び合い・高め合う吉野っ子を目指し、単元構成と1単位時間の学習活動の工夫をしているところです。また、地域の人、物、事を活用した教材開発を行っています。地域の人材につきましては、吉野小の校区内には吉野地区公民館、吉野校区総合町づくり協議会など様々な組織や団体があります。これらに所属する方々に、学習活動の中に知識や技術の専門家として、また一緒に活動し評価をする人材として参加していただき、子どもたちが自分の考えを持ち、行動するための支援をいただいています。

それでは、第5学年「桜プロジェクト」の実践について説明をさせていただきます。単元での目指す姿を、持続可能な社会づくりの構成概念の相互性・多様性・責任性・連携性の4点に重点化し、吉野小学校のシンボルである桜の意味について、先輩や地域の方の思いを通して自分の考えをつくり、これからの吉野小学校や吉野の地域が美しくあり続けるために、友達とかかわりながら働きかけるとともに、活動内容の交流を通して学校や地域への誇りを持つことができることとしました。単元の大きな流れと地域との連携については、課題設定の段階では6年生の思いと自分たちの桜に対する思いを比較し、学習課題をつかみます。次に、情報収集では課題に応じて情報収集を行い、自分の考えをつくります。その際、開校当時の地域在住の先生や見守り隊の方をゲストティーチャーとして招きます。そして、整理分析・実践活動では調べたことを整理し、交流を通して吉野小学校のシンボル桜についての考えを高めます。この後、実践活動に入る前に子どもたちの頑張りを応援しようと本年度、地区公民館で立ち上がった「桜で繋ぐ吉野小と地域の絆プロジェクト」の方々とこれからの吉野の地

域について意見交流を行います。これらの活動でしっかりと考えを持ったうえで、実践活動を行っていきます。さらに、発信の段階では吉野のよさや「桜プロジェクト」について他校や地域に発信し、お互いの取り組みのよさや地域への思いの深まりを見詰め直したりしていきます。地域の人材を活用したり、地域に発信する場を位置づけたりすることで桜を通して地域とのつながりを深めさせていきたいと考えました。

それでは、段階ごとに説明をしていきます。まず、課題設定の段階では昨年度「桜プロジェクト」を始めた現在の6年生と自分たちの吉野小学校の桜に対する思いのズレから課題をつかませたいと考えました。そこで、まず、吉野小学校の桜についてイメージマップを作りました。ここでは「春」「きれい」「花見」「吉野せんべい」等、まだまだ表面的なありきたりの言葉ばかりでした。そこで6年生との交流会を設け、どんな活動をしたのか、どんな思いで取り組んだのか、「桜プロジェクト」を行って感じたことについて交流をしました。この交流会を通して、子どもたちは「桜プロジェクト」を受け継ぎたい、校章の桜にはどんな思いが込められているのか、昔の吉野の町や学校の様子を知りたい等たくさんの課題を出すとともに、全体の課題として桜が私たちの宝といえるのはどうしてだろうという課題に焦点化していくことができました。

本校は昭和32年に開校し、57年が経過しました。校章は、桜をデザインとしたものです。この校章に込められた思いや願いについて知りたいという子どもたちの課題を解決するために、この校章のデザインをされた開校当時の先生をゲストティーチャーとしてお呼びし、校章の意味とその中に込められた思いについて話をさせていただきました。開校当時、吉野小校区内には桜並木があり、毎年桜の季節には地域の人々が集い、花見をしていたこと、校舎ができてまだ何もない敷地内に、子どもたちの健やかな成長を願って保護者や地域の方々がボランティアでたくさんの桜の苗木を運び、植樹をされたこと、そのことから桜の花をシンボルとしたこと、校章の中の片仮名の「ヨ」でつくられた3つの輪は子ども、先生、親のつながりを表していること、さらに、周りの赤は燃えるようなやる気を表していることなどについて話をいただき、子どもたちは校章に込められた当時の方々の思いについて初めて知ることができました。

また、開校当時の卒業生の方には、学校全体を桜の木が囲んでいて満開になると一面桜色で美しかったこと、相撲が強く、勉強や掃除もがんばる勢いのある学校だったこと、桜の美しい学校として地域の誇りだということについて話させていただきました。一方で、桜の木が確実に減りつつあるということを改めて知ることができました。この方からは、自分の美しい花を、吉野の美しい花を咲かせてほしいという温かい言葉をいただき、子どもたちも心にとめることができました。さらに、桜の木が減ってきているのはどうしてかという課題を解決するために桜の木の本数を調べ、校庭に81本あった

桜が今では29本になっていること、桜の木の寿命を調べ約50年が経ち桜の老木化が進んでいること、また、聞き取り調査から地域でも開発とともに桜が減ってきているということを調べていきました。

次に、調べたことを整理分析していきます。ここでは再度、吉野小の桜についてのイメージマップを作成し、交流を行いました。桜には、つながり、元気に明るく、仲よく、誇り、伝統といった学校を愛する思い、さらに花が美しいだけでなく、そこで学ぶ子どもたちの輝きを表しているという考えを高めることができました。さらに、課題把握の場面で焦点化された、吉野小の桜が宝といえるのはどうしてかという問いには、57年もの間、多くの方々のたくさんの思いが詰まったシンボルである宝の意味について考えをつくることができたところです。そして、実践活動に入る前に、先ほど述べました地域の方々に組織されている「桜で繋ぐ吉野小と地域の絆プロジェクト」の方々との交流を行いました。そこで、「桜プロジェクト」を通して考えたことを発表したり、これからの吉野の町について意見交流を行ったりして、お互いに頑張って美しく活気のある町にしていこうと話し合うことができました。その中で、地域の方から『『あいさつ日本一』の看板を掲げているけれども、まだまだですよ』と厳しい言葉もいただき、子どもたちは、これでは桜のシンボルの美しい学校として恥ずかしいなという思いも持ったところです。

これまでの学習を振り返り、話し合う中で、吉野小のシンボルである桜を守っていききたい、広めていききたい、もっと輝かせていききたいという願いが子どもたちから出されました。そこで、どんなことができそうかを子どもたちと話し合い、それぞれのグループに分かれたり協力したりして実践していくことになりました。守り育てるグループでは、桜マップ作り、クリーン作戦、植樹をして桜を増やしていくことになりました。「桜マップ作り」では、校庭の桜の木の特徴を調べたり、みんなに協力してもらい地域にある桜の木の場所と本数を調べ、まとめたりしました。「クリーン作戦」では、時間を見つけて自主的に桜の木の下で落ち葉を拾い集めたり、ごみを拾ったりしてきれいにしていく姿が見られてきました。植樹については、夏祭りや公民館の行事等で「桜プロジェクト」のPRを兼ねて「吉野小せんべい」を販売し、収益金を利用して植樹を行います。吉野の桜について広めるグループでは、さまざまな活動に取り組み始めたところです。これは子どもたちが桜に対する思いや願いを模造紙にまとめ、地区公民館の中に掲示していただくことを公民館の館長さんに依頼に行った時の写真です。館長さんからは「公民館に来られたたくさんの方々に見ていただくよう目立つ場所に掲示をします」と、励ましの言葉をいただきました。これは、先日行われた吉野校区の夏祭りの様子です。5年生の子どもたちが開会式で「桜プロジェクト」について説明することや、桜のみこしや、暗くなると光の桜が浮かび上がるランタン等、自分たちで考え工夫した作品や方法でプロジェクトのPRを行いました。そして、本年度は「サクライオン」というキャラクターが誕生しました。「サクライオン」は吉野

の町、人々の心の美しさのシンボルである桜を守っていこうとする「桜プロジェクト」の中で誕生したキャラクターです。たてがみの5つの花びらは、人々をつなぐ上で大切な「友情」「挨拶」「信頼」「思いやり」「感謝」をあらわしているそうです。先ほどの夏祭りで、オブジェに描いたり販売するせんべいにつけたりして皆に知ってもらうことができ、子どもたちも喜んでいました。さらに、吉野のシンボル桜を輝かせるグループでは、厳しい指摘を受けたあいさつについて、吉野小の皆でやっけないとよくなれないということから、自分たちで看板を作ったりしてあいさつ運動に取り組んでいます。2学期も継続して取り組むことになっています。

このように地域の方の思いに触れ、かかわっていく中で、吉野について誇りを持ち、自分にできることについて取り組み始めたところです。さらに、2学期はこれらの実践活動を継続、発展させていくとともに、取り組みのよさや、自分の見方、考え方の高まりを実感させていくためにも、多様な場での発信の場を位置づけたいと思っています。

これは昨年度の写真ですが、本校では毎年11月に「吉野ユネスコスクールフェスティバル」を行います。このフェスティバルには、保護者だけではなく地域の方々もたくさんお見えになり、子どもたちの取り組みの様子、思いや考えを発信しています。子どもたちは、吉野小学校の桜について多くの方に知ってもらった、地域の方に応援してもらってうれしかった等という感想を持っていました。

また、昨年度は宮城県の被災地のユネスコスクールの学校と交流し、桜の苗木を贈り、植樹をしました。本校には現在、復興桜として校庭で元気に育っています。さらに、「ジャパンアートマイル」の活動を通して、シンガポールやカナダのユネスコスクールとの交流を行いました。子どもたちは、より多くの方々に吉野小学校の桜を知ってもらうことができるよい機会となるとともに、他校との交流を通して吉野の地域のよさを再認識する場にもなったようです。

その他の学年では、4年生はビオトープ作りを通した環境学習について、奈良市立佐保小学校と学習したことをまとめた掲示物の交換等を行いました。6年生は「国際理解」のテーマで、トルコの小学校とお互いの国の伝統文化や生活文化についての交流を行ってきました。トルコの学校とは、本校の校区出身の方がこの小学校にお勤めということから交流が始まりました。先日帰国された際にお見えになり、今年度は「平和」についてお互いの子どもたちの考えを交流してみようという計画を立てているところです。

これまで本校の実践についてお話をしてきましたが、初めに述べましたように、大牟田市は市内の全ての学校がE S Dに取り組み、お互いに情報交換や研修会を行う場をつくって交流をしているところです。これは、各学校の担当で組織するユネスコスクール担当者が毎月発行し、市内の全職員に配付している「ユネスコスクール便り」です。E S Dの考え方や他校の実践について知り、共有化

を図ることができています。これは、毎年1月に市内の文化会館で行われる「ユネスコスクール子どもサミット」の様子です。小学生や中学生が自分たちの学校の取り組みをステージ上で発表します。会場は、子どもたちはもちろんのこと、保護者や地域の皆様も多数参加され、子どもたちの発信と交流の場になっています。

職員の研修会では、ちょうど明日26日に「ユネスコスクール・E S D研修会 i n大牟田」が開かれます。今回は、「みんなで語り合おう、E S Dで育む子どもたちを！」というテーマで国内各地から実践報告が行われる予定です。

最後に、これまでの成果と課題について述べさせていただきます。成果としましては、まずゲストティーチャーや地域の人材を活用することで子どもたちが必要感や切実感を持って学習に臨むことができた、また、地域や他校への発信や情報交換の場を設定したことで目的意識と相手意識を持って学習に取り組むことができるようになったと考えています。課題としましては、本校がE S Dの視点に立った子どもの姿を今後どう評価し見取っていくか、また、学習内容に応じた地域の人材、交流する相手の掘り起こしと整理が大切であると考えているところです。未来に思いを馳せ自分の考えを持ち行動できる子どもの姿を求めて、今後も実践を積み重ねていこうと考えております。よろしくお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

荒木先生、ありがとうございました。

(2) 「世界の中の一人として、社会を担い、未来を創造する資質の育成——E S D子ども

みらい会議を通して——」 鈴木 萌(多摩市立多摩永山中学校)

○司会 住野好久(岡山大学大学院教育学研究科)

それでは続きまして、中学校の報告です。大牟田市と同じく、市内すべての学校がユネスコスクールに加盟しております東京の多摩市立多摩永山中学校の鈴木萌先生です。よろしくお願いいたします。

○鈴木 萌(多摩市立多摩永山中学校)

ただいまご紹介にあずかりました、東京都多摩市にあります多摩永山中学校の鈴木萌と申します。本日は、貴重な機会をいただきましてありがとうございます。よろしくお願いいたします。それでは、始めさせていただきます。「世界の中の一人として、社会を担い、未来を創造する資質の育成」と題しまして、先日行いました「E S D子どもみらい会議」という学校間での交流事業を中心に実践報告させていただきます。

まず、私自身の授業や本校でのE S Dの日常での取り組みについてご説明申し上げまして、そういった素地があるうえで、今回の「E S D子どもみらい会議」に参加してみてどのようであったか、今回の結果として学校間ネットワークの意義と課題は何なのか、そして、これからのE S D学校間ネットワークの活用についてまとめたいと思います。まず、日常のE S Dの取り組みについてです。私は研究主任もさせていただいているのですが、本校では、校内研究の主題としまして、「クリティカル・シンキングの実践による思考力・判断力・表現力の育成」という主題で取り組んでおります。クリティカル・シンキングというのは、すでにご存じのように、批判的な思考ですとか批評的な思考と訳されます。E S Dにおける重要な視点の一つです。本校の研究では、物事を多様な視点から考察することとクリティカル・シンキングを定義しております。各教科の授業はもちろん、道徳の時間、総合的な学習の時間、学活、朝礼、朝学習等、学校生活のさまざまな場面で実践するようにしています。クリティカル・シンキングの実践に当たりまして「多面的・多角的な視点」「論理的な思考」「メタ認知」、この3つの要素を意識して、それによって生徒の思考力・判断力・表現力を育成するという研究です。

そういった本校の研究主題を受けてということもありまして、授業ではクリティカル・シンキングに基づいたE S Dの視点を取り入れております。私は社会科の担当なのですが、社会の授業として試行錯誤中ではありますが、実践しているE S D的なものを一部紹介させていただければと思います。

まず、「時事ノート」という活動を実践しています。これは、こちらでお題を決めまして、例えば国際平和、政治経済、社会問題など、その都度お題を決めて生徒がテレビや新聞、インターネット等からニュースの記事を選んできまして、それについて考えたこと、今後の解決策、展望を書くというものです。3年生では月に1回ぐらいで行っていましたが、自主的に自分で取り組んでいる生徒もおります。この活動の目的は思考判断力を育てるということです。

次に、「激動の20世紀レポート」という活動です。これは3年生の夏休みの課題として出しています。20世紀に起こったこと、例えば第2次世界大戦の中でナチスドイツによるホロコーストが起こった、ユダヤ人の迫害がどのようなもので、現在の世界にどう影響しているかということを調べるというものです。もちろん、その時に起こったこと、それが現在の世界にどう影響しているか、まさに今、イスラエル、パレスチナで紛争状態というようなことがあるわけですが、もちろんその状態というのは、到底、持続不可能なものですから、ではそれを世界の平和につなげるため、持続可能な社会を築くためにはどうすべきかということ自分で考察してくるというものです。これは、歴史的分野の最後に調べる時間を少し設けて、夏休みの課題としました。また、公的分野の最後には「国際平和」という単元がございます。そこでもまた、この素材を使って展示やディスカッションを行うというふうにご考えております。

最後に、「模擬裁判」という活動です。これは裁判員制度が導入されてから、授業で行っております。ある架空の刑事事件についての裁判を設定し、その裁判について班で話し合いをさせ、班ごとの判決、その理由、さらに班同士でどうしてそういう判決になったのか等の質問をさせ合ったり、反論させ合ったりする等の活動を行っています。裁判を聞いた直後にも、話し合いをする前にも自分自身の意見をワークシートに書かせているのですが、班での話し合いを経た後、また班同士での質問をし合ったり反論し合ったりという発表を経た後ですと、こちらで回収したワークシートを読むと明らかに考えが変わっている、あるいは結論は同じでもより深みがある、発展しているという生徒が非常に多いのですね。したがって、これはメタ認知の育成になっているのではないかと考えて実践しています。

参考までなのですが、こちらが先程ご説明申し上げた「時事ノート」の書式なのですが、資料のほうにもつけさせていただいています。試行錯誤しながら毎年更新しています。また年度当初にこういうかたちで評価していくというようなことを含め生徒に渡しているもの、それから、実際に生徒が書

いたものを掲載許可をとり配布しております。今回、皆さんに向けて配らせていただいたものは1人分しか載せていませんが、毎回よく書けている6、7名のものをピックアップして、私のコメントとともにフィードバックしていくような実践を行っております。

続いて、学校全体としまして国際理解教育としての取り組みをご紹介申し上げます。本校では、私は国際理解担当ということもありまして、留学生の話を聞く会というものを実施して企画しております。国際理解支援協会の方に依頼しまして、3学期に外国人留学生の方を招いて、出身国の紹介や留学生講師の方自身の生き方について、各クラスで講義をしていただいています。それに対し、事前学習でその国を調べたり地理の時間で学習する朝学習の時間に折り紙を使って、講義していただいたお礼に何かクラスで作品を作ったりと相互交流できるような形での活動を心がけています。今年度は新たに、クラス単位ではなく学年単位でパネルディスカッション的なものがないかということを立てています。また、道徳地区公開講座でも今年度、本校は「国際理解」をテーマにし、各学年で道徳授業を企画しております。その後で、全校の講演会として青年海外協力隊のご経験がある方に講演を依頼しています。

さて、そのような中、今回、「ESD子どもみらい会議」への参加がありました。こういったESDの取り組みの素地があったということで参加することになったのですが、「ESD子どもみらい会議」と申しますのは、ユネスコスクール同士が交流を活発に行い、ESDを推進していくという目的のもと、岡山市と多摩市のユネスコスクールで学んでいる2、3年生の代表生徒で計16名が、これまでに学習してきた内容を踏まえて「平和」をテーマに意見交流をするというものでした。最終的に「中学生平和宣言」というかたちでまとめまして、先日行われました国連大学のESD地球市民村でプレゼンテーションを行いました。

会議の通信手段は、多摩市と岡山市でベネッセコーポレーションに協力をいただいて、テレビ会議システムを使用します。岡山市立京山中学校と、多摩市からは東愛宕中学校と本校が参加をしました。本校からは4人の生徒を選出しましたが、先ほど申し上げた「時事ノート」や、国語や英語のスピーチ等の活動内容をふまえてふさわしい生徒を4人選出しました。みらい会議は夏休みに入った7月下旬から8月上旬の土曜日の午前中に行いました。1回目は、3校それぞれの自校の紹介ですとか、平和についてこういうふうな社会や道徳の授業で考えてきた等という報告、そして2回目以降は、テレビ会議でディスカッションをワールドカフェ形式で行いました。2回線つながりまして、1つのテーマについて時間を区切って、メンバーチェンジしながら2部屋で議論するというかたちをとりました。

議論を進めていくうちに、子どもたちからは、伝え合うこと、話し合うこと自体が大切であるということ、物事は国や文化、環境によって見え方が変わってくるだろうということ、自分の意見をきち

んと持っているべきこと、そのためには正しい情報や知識を得るべきだということ等が上げられました。これらを「中学生平和宣言」という形で、1人ずつ宣言文のようにまとめて、E S D地球市民村、先ほど申し上げた国連大学で行われたもので発表に向けて準備をしました。

この「E S D子どもみらい会議」の様子が少しですがわかるDVDがございますので、ご覧いただければと思います。これは、市教育委員会が作成したものです。

(DVD上映)

今お見せしましたものは、この間の金曜日、国連大学で開催された「E S D地球市民村」で発表した時にも流したものです。この「E S D地球市民村」は、ご存じの方も多いかと思うのですが、E S Dを推進する市民団体、企業、行政、NGO、小・中学校等の団体がプレゼンテーションを行ったり、展示をしたり、体験コーナーをつくったり等の企画でした。そのなかの「次世代からのE S D体験報告」という枠の中で、多摩市と岡山市のユネスコスクールからの発表ということで出させていただいたものです。

発表の様子はこのような形です。後ろのスクリーンの映像は、今お見せしたものです。ここに3校からの代表生徒が並んでおります。その時の「中学生平和宣言」がこちらです。一部だけ抜粋してきましたが、このような文を各自が作り、英訳もつけて当日資料として配付いたしました。

さて、以上のような日常の取り組みや、「E S D子どもみらい会議」という学校間交流を通しまして、学校間ネットワークの意義や課題は何なのかというのを、私自身の経験を踏まえてではありますが、まとめさせていただきます。まず、学校間ネットワークの意義です。今回感じたこととしましては、まず、各校の特色を生かせるということがあげられるのではないかと考えました。といいますのは、「平和」というテーマについて、子どもたちは他校の生徒と話していく中で、例えば、先程ご紹介しました「時事ノート」に自分が書いたことを思い出してそれを話題にすることや、自分たちの学校では留学生の話聞く会があって、そういう時このようなことを学んだというふうに、今までの取り組みを自発的に他校生との交流によって引き出すんですね。ですから、それが自校での取り組みの成果の確認にもなったのではないかと考えました。

続いて、話し合いが馴合いにならないということが上げられます。自校の中で話し合いなどの活動をしておりますと、普段、生活を共にしている間柄であるがゆえに、もちろん私たち教員も含めてなのですが、言葉が足りなくても通じてしまうということが多いものです。しかし、他校生との話し合い等の交流においては、そういうわけにもいきませんので、逐一、生徒たちは説明をすることになり

ます。うちの学校ではこういうことを行っていて、それというのはこういう取り組みなのですが、それでこういうふう思ったなどという具合ですね。すると、そこまで気が知れてないからこそ、逆によい緊張感がありまして、その上で言葉を選んで情報を抽象化しながら伝わるように考えて発言することになります。これは、子どもたちの話し合いを聞いてとても新鮮なことでした。そして、これは必要なことだとも感じました。

続いて、自校での取り組みを振り返るきっかけになるということをおげました。子どもたちにとっては日々の学校生活というのは自分の家庭以外での生活のほぼ全てであって、まるで自明のものかのような感覚でいることが多いと思うのですが、他校の生徒と話しながら、自分たちが取り組んだことがない学校の活動があるのだということを知り、それを実践したい、あるいは自校でも何か似たようなことをしたら面白そうだという発想が生まれます。実際に本校の生徒も、他校生の話を聞きまして自分の学校でも似たようなことをしたいなという発言がありましたので、視野を広げることにつながったように思います。

最後に、地域の特色や課題を再確認できるということをおげました。今回は、同じ多摩市の学校同士での交流ということでもありましたので、地域についてどのように考え、それぞれの学校でどのような活動をしているのかが比較できました。例えば多摩市は、多摩ニュータウンがあり、現在、高齢者がとても多いということ知られています。そういう認識というのは、やはりそれぞれの学校で共通しており、それについて中学生としてどういう取り組みができるか、こんなボランティアはできないかなどというふうを考えているということを再確認して見直せて、発展させることができたように思います。

一方で、今回の取り組みから明らかになった課題を考えました。まず、学校間交流をただで満足してしまうことがありそうということ。これは学校間交流に限らず何でもそうだと思うのですが、手段が目的化しないように注意しないといけないと感じた次第です。今回はユネスコスクール同士で交流し、「ESD子どもみらい会議」を経て「中学生平和宣言」を発表するという企画でした。私自身、それでかなり勉強になりましたが、やはり最初の段階から学校の担当者として、ESDについての学校間ネットワークをつくることの意義とは何かをもっと意識しながら生徒への指導も行えるとよかったという反省もありました。

次に、方法の選択です。今回の「ESD子どもみらい会議」では各校の代表者が直接会って議論するという形式をとりました。また、多摩市の中学校では学年全員で直接会っての交流として、ダンスやスポーツを一緒に行ったりするという事例もございます。また、直接でなくても文章や作品のやりとりという交流もあります。大切なのは、どういう方法を選択することがその課題に対して最良の手

段でE S Dにつながるかということです。もちろん私も例外ではなく、実施してみて初めてわかることもあります。今回がそうでした。ただ、学校間交流というのはお互いに相手があってこそ成り立つものですので、こういう特別な取り組みをしたという、実績をつくるというだけではいけないわけで、その学校間交流という手段からどういうE S Dの力を養うのかというのを相互に学校同士で共有しながら進めていく、そのための最も適切な方法をとるといふ共通理解が前段階として大事であるということには身に沁みました。

続いて、日程の調整です。やはり学校間交流というのも、簡単にしようと思っただけではできないと思います。特に、最近の報道でも言われているとおり多忙を極める中ですので、日程の調整は大きな課題でもあったと思います。今回は夏休み中の土曜日に3回実施しましたが、学校同士のスケジュール合わせや交流の時期、回数、事前事後の学習、準備等を一貫して展望しながら計画していくと窓口役はどうすればいいのかなどという点も大切で、学校同士であるから組織体制も整えていくという必要があるのではないかと思います。今回は教育委員会のほうで調整を主導して行っていたという形だったのですが、色々なやり方があるのではないかと考えております。

そして、環境の整備です。今回は、E S Dに積極的に取り組まれているベネッセコーポレーションの協力がありましてテレビ会議ができました。そういった設備を整えることも考えていかないとけないのではないかと考えています。あるいは、直接会って実施する場合、しかも、それを継続的にやっていく場合でしたら人数規模にもよりますが、会場の確保や引率ということも考えていくということが必要です。事務的で、当たり前といえば当たり前というような課題なのですけれども、やはり大切なことではないかと考えましたので、改めてこちらにあげさせていただきました。

以上述べてまいりました学校間ネットワークの意義や課題を踏まえまして、これからのE S D、学校間ネットワークの活用についてまとめました。授業では、より体験的な学習を取り入れたいというふうに思っています。これは私自身が社会科だからということもあるのかもしれませんが。例えば、理科の実験や美術の鑑賞等は、より体験的、実技的な活動とタイアップできればと考えているのです。産業革命で蒸気機関ができました。では、理科で「蒸気機関でどうやって動くのか実験してみよう」ですとか、ルネサンスを歴史でやった。では、「歴史的背景はわかったけれども、美術的観点の画法はどのようなものなのか」というような感じですね。普段から教員間でそういう話もしているわけですし、授業でも折に触れて美術でもしたというようなこともあるわけなのですが、これをもっと子どもたちのほうからより意識的にするにはどうすればいいのかなと考えています。そして、更に横断的になるような工夫を総合、学活、道徳の時間も含めて考えていくことができればと思っています。

また、国際理解においてですが、今までは交流をメインに取り組みまして、道徳の時間等でも、違

いを受け入れることやお互いを尊重することの大切さを気づかせるような授業に取り組んでまいりました。しかし、本来、現代の社会では実際に差別や偏見は根強くありますし、無意識的なところにもそれは存在していて、それが歴史的、宗教的背景にも起因しているのだということも取り入れたい視点です。明るく肯定的に前向きにというだけでは終わらせられない難しさがありまして、だからこそ、それが今、持続不可能な問題になっているのだということに気づかせることが「多面的・多角的な視点」にもつながっていくのではないかと「国際理解」において考えています。

また、学校間の交流です。先程、方法や環境の整備に言及いたしましたが、今後はより多くの生徒が参加できるように意見の集約、意見交流、アンケート等の交換や報告ができるようになればと考えています。例えば、地域間で行うとすれば、日頃は文章や作品を通して全体での全員での交流をし、直接会っての話し合いは代表者が行い、そしてテーマを地域に根づいたものにする。あるいは、長距離間で行うならば、中学生ならではの共有できること、同世代だからこそ共有できるというテーマ設定をしていくことで、学校間ネットワークという手段がより活用されると考えます。それで、広がり、深さ、多面性のある交流に発展すると考えました。

それから、これは今までお話しした流れと少し変わるかもしれませんが、今回取り組んでみて感じたことに、アプローチの課題があるのではないかと考えましたので、説明させてください。そもそもESDの目的というものは、持続不可能な問題、地球温暖化、環境破壊などを解決する能力を育てていくことです。これらの諸問題は、相互に関係しています。しかし、切り口によっては、教える側の立場として、アプローチの難しさを感じたということは事実でした。例えば、戦争や国際紛争、安全保障等といった分野です。今回の「ESD子どもみらい会議」のテーマが「平和」でしたので、これらのことはまず子どもたちからやはり真っ先にあがってきました。しかし、議論を聞いてみますと、子どもゆえにこれらの課題に対して直情的な考えがありました。それは生の声であり、大切にしたい気持ちです。ただし、個人の考えに終始するのではなく学校間で交流をして発表やまとめをするとなった時に、直情的な表現を、多面性・多角性をも考慮して、ありのまま、より多くの人に発信するためにどのように普遍的にしていくのかなどという葛藤もございます。そもそも、現在起こっている持続不可能な問題というのは、持続不可能であるがゆえに暗いこと、怖いこと、目を背けたくなることばかりであるはずで、それを解決する能力の素地をつくるので、やはり苦しくなることはあるのではないかと感じましたし、だからといって、もちろんESDというのは新しいことを特別にするというわけではなく、今までしてきたことの視点を変えるという意味なのですけれども、それでも明るく前向きにばかりは捉えられなくて、真実と向き合うという場面も出てくるのだなと感じました。これは学校間交流だったからこそ、それだけ子どもたちが今回本当に伝えたいことを整理して言葉にして

くれたので、こちら側としても見えてきた課題でもあります。

「平和」というテーマはすべてにつながることでしたので、今回の交流で、まずはその第一歩が踏み出せたと思います。そして何より、子どもたちの考えていこうという姿勢がつけられたこと自体が出発点になりました。子どもたちは、学校間の交流から色々なことを知り、考え、発信しました。これから、どうつなげていくかが問われていくのではないかというふうに考えます。

最後に、これから意味のある学校間ネットワークにするには、まず日常から学校全体でE S Dに取り組んでいき、その素地をつくること、そして目的やテーマを明確にしておくこと、子どもが相手に伝えたいという思いを持たせるそそのかしを行うこと、そして、まとめ・フィードバックの機会を学校間交流の際にもつくること、日程調整、環境整備等の事務的なことは組織的にやっていくこと等が必要となると考えます。そして、これらを意識して、単発なイベントで終わらせないで交流が次の学びのステップにつながることをこそが今回の研修会のテーマであるE S Dのための学校間ネットワークの活用になるのではないかと結論づけさせていただきます。現に、学校に持ち帰って、この「E S D 子どもみらい会議」のことを学年集会や朝礼などで発表したいという声が生徒のほうから上がりまして、そういう企画もしようかなと思っているところです。2学期は、そこから次のステップを踏み出せればと考えております。

色々と述べてまいりましたが、私自身、試行錯誤している中での実践報告でありましたこと、どうぞご容赦ください。この後の分科会でもより深め、皆様からたくさん学ばせていただければ幸いに存じます。以上で発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

鈴木先生、ありがとうございました。

(3)「アジアの高校生とともに学びあうESD実践——高校生ESD国際シンポジウムの取り組みを例に——」 今野良祐(筑波大学附属坂戸高等学校)

○司会 住野好久(岡山大学大学院教育学研究科)

続きまして、高等学校の実践報告ということで、筑波大学附属坂戸高等学校の今野良祐先生です。よろしくお願ひいたします。

○今野良祐(筑波大学附属坂戸高等学校)

先生方、改めましてこんにちは。埼玉県にございます筑波大学附属坂戸高等学校の今野良祐と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。前のお二人の先生方に比べると少し丁寧な発表ではないかもしれませんが、本校の「高校生国際ESDシンポジウム」の取り組みを例に、学校間ネットワークの話題を提供させていただければと思います。私事ですが、2011年1月にこの岡山大学での研修会に初めて参加させていただきまして、まさか自分がここでまた発表するという機会をいただけるとは本当に予想もしませんでした。本当に貴重な機会をお与えいただきまして、誠にありがとうございます。



少し本校の説明からさせていただければと思います。筑波大学の附属学校は、全部で11校あるのですけれども高校は3校です。坂戸と有名な駒場高校と附属高校の3校になります。駒場高校、いわゆる筑駒といわれるところと、筑附といわれる附属高校は、偏差値の高いエリートが集まるような学校なのですが、あまり坂戸は知られていないのですね。もともと、農業科、機械科、家政科を有する専門高校でした。1994年に総合学科に改編をしまして、いわゆる日本の一般的な高校生のレベルの生徒がいる学校です。学年で160名、480名という小規模校の学校になっております。年々、大学、短大への進学希望者が増えて今や8割は大学・短大進学、専門学校進学2割、若干名が就職、その他というかたちになっております。2011年1月にユネスコスクールに加盟をしまして、今年度から文科省の「スーパーグローバルハイスクール」に指定をさせていただきました。ですので、国際教育には以前から力を入れているのですけれども、更に加速をさせていくというような状況にあります。

先生方のご存じかと思いますが、総合学科の特徴としては、自分で自分の時間割を作ることができることがあります。本校も普通教科から専門教科まで、100科目ほど様々な科目を用意してまして、そこから自分だけの時間割を作ることができるというわけです。それから、例えば農業高校とか工業高校とは違って、複数の専門分野にまたがって勉強することができるというのが1つ大きな特徴になるのではないかと思います。例えば、調理師になりたいという子が食品、調理の授業を学ぶとともに、農業の授業も選択をして自分で野菜作りをする、それを使って料理をするという勉強もできます。あるいは、最近毎年のようにいるのですが、ロボットが好きで将来は福祉ロボット等をつくりたいという子が、工業の授業とともに福祉科の授業を選択するというかたちで、複数の専門分野にまたがっていわゆる学際的な総合的な学びをすることができる学科です。

E S Dに関しても先生方のご存じだと思いますけれども、赤字で書いた、学際的、総合的に取り組むことが必要だというようなところで、まさに総合学科でしていること、これはE S Dに適しているのかなと思います。更に、環境・経済・社会・文化、これも全て網羅させていただいています。もう少し具体的に言いますと、1年生で「産業社会と人間」、3年生では「課題研究」ということで、各自テーマを持って研究活動を行います。間に総合学習が入りますけれども、このようなかたちで3年間が進んでいます。

一応、生徒には学習の段階として、これは別に学年でしばっているわけではありませんが、まずは視野を広げていこう、そして、それを自分の中でつなげてみよう、更に、それぞれを深めていこうというような、少し分かりやすい平仮名を交えて、このような段階を踏んでいこうという話をしています。また、学習の視点としては、まずは、やはり「知る」。「知る」だけでは世の中よくならないということで、それを「考える」、場合によっては解決策などを「考える」。一番最後の「行動する」というところがなかなか難しいことではありますが、「知る」「考える」「行動する」と「広げる」「つなげる」「深める」という視点、段階を提唱して、学校全体でE S Dに取り組んでいるという状況にあります。ですので、本校ではE S Dは総合学科の教育そのものだというふうに校内の先生方に呼びかけて、全校あげて実践しようと言っています。

それで、お手元の資料「平成25年度 国際教育推進委員会活動報告」の最後のページには、「筑波大学附属坂戸高等学校 ユネスコスクール・E S D実践概要図」を掲載しています。一応、この図の下のほうから、学年進行で1、2、3というふうに上がっていくようなかたちで図を構成しております。後ろのほうにユネスコと書いてありまして、パルテノン神殿のユネスコのマークが実はこの中に隠されているという遊びも入れながら、多角的なアプローチからE S Dに取り組んでいるというような概要図になっています。

本校では、E S Dを推進する組織は国際教育推進委員会に入っております。ここがE S D、国際教育を引っ張っています。なので、必然的に色々なことをやっているのですが、本校のE S Dは国際教育が中心になっているというところがございます。

さて、本題に入りたいと思います。「高校生国際E S Dシンポジウム」ということで年によって国は違うのですが、アジア各国から高校生、教員を招聘してシンポジウムを開催しています。今年で3年目になります。その趣旨ですが、海外の高校生との交流を深めて生徒の国際的な視野を広げるとともに、持続可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養かんようするということを目的に実施しています。毎年、秋頃を実施するのですが、これは同時期に実施される筑波大学の「国際農学E S Dシンポジウム」に本校の学校用の枠を設けていただいてそこに参加します。多少、筑波大学の留学生獲得の広報戦略もあるのでしょうかけれども、そことマッチングさせるために時期が10~11月と年によって変動します。中身としましては、シンポジウムの他に全校での歓迎会、一般の授業への参加、文化交流会、それからホームステイ等を実施するという内容でございます。

これは2012年のスケジュールです。1週間程度日本に滞在して、基本的には本校の生徒宅にホームステイをするというかたちです。例えばこれですと、11月1日に筑波大学、茨城県に移動して大学のシンポジウムに参加する、その前の29~31日に関しては本校で交流をするというスケジュールになっております。

それでは、幾つか写真を少しお見せしたいと思います。こちらは、到着した夜です。午前中に到着するのですが、本校に来る頃には夕方になっていますので、少し疲れているところだと思います。この写真はプチ歓迎会ということで、ジェスチャーゲームをしているところです。翌日、全校での歓迎会を行います。記念品交換も行いました。この写真は大学でのシンポジウムの本番の時のものです。大学のシンポジウムは海外の研究者たちに向けて発表するのですが、その練習も兼ねて校内でシンポジウムを行います。一般の授業への参加ということで、私の地理の授業等にも参加してもらいました。こちらはワークショップの風景です。本校の教員が東京都市大学の佐藤真久先生と同級生であるというつながりから、佐藤先生にお越しいただいてフォトランゲージのワークショップ等も体験してもらいました。

こうした学びの部分だけではありません。これは、全校生徒に開放する文化交流会の様子です。これはフィリピンの生徒たちが歌を歌ってくれているところです。こちらは筑波大学でのシンポジウムです。ポスターセッションも同時に行われていまして、外国の研究者の方に英語で発表している風景です。この写真は、今年のシンポジウムの様子で若荷谷みょうがだににある筑波大学の東京キャンパス文京校舎でプレゼンテーションをしているところです。各国の発表終了後はパネルディスカッションということ

で、英語で持続可能な社会をつくるためにはどうしたらよいかをテーマにディスカッションをします。以上のように、シンポジウムを実施させていただいております。それでは、少し内容に関して、まず開催の経緯から説明したいと思います。

まず、何よりも大きなきっかけは2011年にユネスコスクールに加盟したということです。ユネスコスクールには、色々とメリットや機能があります。ESDを推進していくということや、国内外の様々な学校、団体とのネットワークをつくることができるということ、世界中の人たちと学び合いができるということがユネスコスクール公式ホームページにも書かれています。最近、マッチングサイトができましたけれども、それまではなかったのですね。ACCU（ユネスコ・アジア文化センター）の方などにも問い合わせをしたのですが、なかなか海外のユネスコスクールを探すことができませんでした。それでも、何か機会があれば、いずれは高校生の国際会議をやりたいよねという話になりました。海外の高校はどちらかというと普通科よりも専門、テクニカルスクールのほうが多いと聞いています。本校も農業や工業などの専門として学んでいる生徒がいるので、専門同士をぶつけ合うような高校生の国際会議をしたいということで、動き出しました。

そこで、「どうやるの」「誰がやっていくの」というようなことになり、言い出した私も「私がやります」ということになり、何と「国際三兄弟」が誕生したのです。ある世界では有名なのですが、本校の教員で国際教育を主に取り組んでいる3人の教員ということで、一応、長男・次男・三男と名づけてもらったのです。長男は国際教育推進委員会の委員長の岡野先生です。次男が農業科の教員で現在、CISの委員長をしていますけれども、彼はもともと、青年海外協力隊として2年間インドネシアに行っておりまして、それで本校がインドネシアとかなり深いつき合いがあるところにつながっています。三男が私です。それぞれ色々な国際経験があって、授業の中でも国際教育をやっているというので、外部の方が「では、君たち三兄弟だね」ということで命名してもらいました。この「三兄弟」に限らず様々な専門を持った教員がいるので、校内の人的資源を最大限に活用しようではないかということになっています。英語科、社会科の教員だけではなくて、学生時代にバックパッカーをしていた教員など色々な教員がいるので、それを活用して全校で取り組んでいこうとしています。

次に、招聘する学校はどうしようかということになりました。当時はマッチングサイトに関してはありませんでした。ユネスコスクールについて英語でインターネット検索してもなかなかヒットしないので、ではどうしようかということで、これまでの姉妹校や交流実績のある学校にまず声をかけてみようということになりました。まず、ボゴール農科大附属コルニタ高等学校に連絡しました。この学校とは2011年3月に姉妹校締結をしたのですが、それまでに2009年から別のプログラムで協同学習を行った経験がありました。また、2012年3月には、インドネシア林業省の高校と連携協定を行い、

その後台湾、タイ、フィリピンの学校に、筑波大学の力なども借りながらも声をかけてみました。その結果、全ての学校から是非やりたいという声をいただきました。

このようにして招聘する学校は決まりましたが、お金はどうするのかという話が残りました。渡航費がかなりかかるのです。色々な諸経費もかなり面倒を見ないといけないということで、予算をざっと計算しました。〇百万円かかることがわかりました。成田空港から学校まではバスで2、3時間かかるのですが、バスもチャーターしなければなりません。全部お金がかかるのです。では、その〇百万をどうするかということが大問題です。どこの学校でも国際交流のプロジェクトはお金の部分が課題になると思います。本校の場合は、幸い筑波大学との関係があったということで、学内の競争的資金に応募して、採択していただきました。しかし、これは安定的なものではないので、いつなくなるか分かりません。ただ、必死に書類を書き、必死に説得しまして、何とか3年間お金をいただいているところです。しかし、これだけでは足りませんので、外部資金も含め様々な資金源を組み合わせ、2～3百万円を確保しているという状況でございます。

本番までの流れですけれども、5、6月には日程とテーマ・内容がおおよそ決定し、検討が始まってきます。それを受けまして、7月にはインビテーションレターを交流校に送付します。8月中に参加の可否の返答があって、現地では派遣生徒の選定などが始まっていきます。2学期が始まりますと、本校の側でもシンポジスト、代表生徒の選出やホストファミリー、その選定を始めたり、色々な歓迎会等の準備を開始したりしまして、10～11月には本番を迎えるという流れになります。

ホストファミリーに関してなのですが、年度当初に全校生徒の家庭にホストファミリーバンクへの登録のお願いというお手紙を出します。海外からたくさんお客さんが来る機会があるのでホームステイを受け入れてもらえませんかという内容で、男性女性どちらであれば大丈夫ですか、何名まで大丈夫ですか、ペットはいますか、色々なことを書いてもらうようなかたちで、約20～30名の生徒の家庭が、毎年登録をしてくれています。ただし、これは、ここで登録したから必ず海外の生徒を受け入れなければならないということではありません。その後、日程と受け入れ人数や性別、アレルギーの有無など様々な情報が出そろった段階で、改めて登録家庭に本調査をします。例年、このシンポジウムと同時に3週間の短期留学生が来るので、その留学生の受け入れも含めて調査をします。ただ、3週間も受け入れるというのは厳しいですね。特に3年生は、受験を控えた11月ということもあるので1週間区切りでも、1日でもいいですよということでお願いしています。それでも受け入れ数が足りない場合があります。その場合は後援会に頼ります。卒業生に声をかけまして、何とかホストファミリーを受け入れてくれないかとお願いするのです。卒業生でも国際交流が好きな人がいるので、もし機会があれば卒業後でも声をかけてくださいといってくれているので、そういう人たちに頼った

りもしながら、ホストファミリーを確保し、ホームステイをしてもらいます。

昨年は日本・ASEAN友好協力40周年記念ということで、外務省に認定されたイベントになりました。ただ、お金は一銭も出ませんでした。ロゴマークが使用でき、認定されているイベントにすることができました。実施の中心は、基本的にはサポートメンバーというボランティアの生徒たちが運営していくようなかたちをしています。全校の歓迎会の運営、シンポジウムの司会進行、文化交流会での日本の出し物、それからフェアウェルパーティーの運営など、全て生徒に任せます。できる限り本番中、教員は前には出ないようにしています。ただ、そのためにはやはり色々な事前指導が必要で、仕込むところはしっかり仕込んで、生徒に任せるようにしています。

例えば、当日のポスターセッションのポスターの張り出し等も、生徒たちが場所を考えながら張り出していきます。それから、外部の方の受け付け等もやってもらいます。当日の司会進行は、もちろん台本に関しては英語科の教員と一緒に考えていきます。シンポジウムに直接かかわる生徒だけではなく、滞在期間中の昼食については、家庭科の授業で松花堂弁当を作ってそれを提供するなどしています。ただ、インドネシアの方はムスリム（イスラム教徒）ですので、ムスリムの方でも食べられる料理ということで、文化に関しても学んだりするというかたちで、シンポジウムの生徒以外にも関わってもらうようにしています。

これは、私の国際科の授業ですけれども、シンポジウムに参加できないので、プチシンポジウムを企画して、ポスター形式で持続可能な社会づくりのためにはどうしたらよいかを発表してもらう機会を設けました。やはり、どうしてもシンポジウム本番は参加できる生徒に限られてしまうので、一般の授業等でこのシンポジウムの期間に向けて準備をしていくという方法で実施しました。

さて、その後の成果としましては、どうしても英語が好き、または国際交流がしたいという生徒が多く参加する行事なので、この1週間の国際交流の期間を経てそういう進路に進んだり、あるいはそれが日々の国際の学習に結びついていたりするところが見られます。けれども、どうしても単発イベントで終わってしまいがちであるというところはあります。それから、全校で取り組んでいるとはいえ、本当に全校とは言い切れない部分があり、それはやはり何とかしたいということで継続的な交流をするためにはどうしたらよいかについて、いくつか方策を立てました。

まず、修学旅行についてです。本校では観光旅行だけではなく、きちんと学びましょうということ海外校外学習という言い方をしていますけれども、これを姉妹校とか交流校への訪問に充ててしまおうと考えました。インドネシアの姉妹校、台湾の交流校に訪問するだけではたぶん生徒が集まらないだろうということで、オーストラリアを含めて修学旅行を国際交流として企画し、現地の高校生との交流に充てることにしました。2年生の12月に行くのですけれども、1年生の段階で希望をとりま

す。行き先によって金額が違ったりする等、色々大変なところはあるのです。やはりお金がかかる行事ですので、現地で協同学習、ホームステイをするというようなかたちにしました。

それから、これはスーパーグローバルハイスクールに指定されたことを受けて取り組んでいるのですけれども、「国際フィールドワーク」という時間割外科目を実施しています。今まさにインドネシアで3週間の調査研究活動をしているところです。今週の28日に3週間の活動を終えて帰ってくるのですけれども、その後も交流を続けるような工夫を何とか入れています。

この写真は、台湾の高校ですね。修学旅行です。こちらはインドネシアですね。これは、昨日現地から写真をもらいました。「インターナショナルフィールドワーク」ということで、林業省附属の高校生とともに環境活動をしているところです。

また、「国際フィールドワーク」では、外部の団体、ヤマハとJICAと連携して、森を守るプロジェクトに参画しています。こういった形で、シンポジウムに呼ぶだけではなくこちらからも行くのです。ただ、お金がかかってしまうので、こういった機会を利用して何とか海外に行こうとしています。

それだけでは足りませんので、昨年「ESD Rice Project」というのが始まりました。日本では3校がプロジェクトに参加していますが、そのうちの1校として参加し、アジアの食、米をテーマにして6カ国の高校生による協同学習をしております。これはワークショップの時の様子ですが、本校は、農業科の授業があって台地上に、みんなで水田を作ったのです。すぐ水が抜けて大変なのですが、これを農業科の生徒だけではなくて福祉の生徒、それから私の地理Bの生徒、色々な教科の授業でお米作り、水田作りに関わって、お米というものに対して色々な角度から学んでいこうという学習を展開しています。そこに海外交流をリンクさせて、国際協同学習に仕上げたいと企画しているところです。

今後の課題ですが、色々あります。まず、語学力です。本校以外の参加校は比較的優秀な学校で、難しい英単語もどんどん使うような生徒が多いようです。本校の生徒はたぶん内容が分からないので、「Do you have questions?」と尋ねても、教室が静まり返ってしまいます。逆に、自分たちの英語もなかなか伝わらないということもあり、語学力に関しては何とかしたいと考えています。

それから、どうしても分かりやすいため環境などがテーマになってしまうのですが、本校には色々な専門分野の学習機会があるので、それが生かせるようなテーマが設定できるといいと考えています。

また、単発なイベントで終わるだけではなくて、それをどう継続させていくかも課題です。終わった後に生徒は英語をきちんと学ばなければというのです。しかし、その意義は時間とともにどんどん低下してしまいます。それをどう持続させていくかが課題です。それから、持続可能な社会づくり

についてパネルディスカッションをしましたが、そのディスカッションをしたことがどうなっていくのかということに対し、あまり関心を示していないという課題があります。これも何とかしたいなどと考えています。

また、どうしてもやはりお金がかかる行事ですので、恒常的・安定的な資金源の確保というのが必要になります。これに関してはよい解決策がないので、大学に訴えたり、様々な公募にがんばって書類を作成し応募するなどの努力をしているところです。

こうして、今年度も何とか実施することができています。11月の前半に「ユネスコスクール世界大会」がありますが、その翌週に、本校では「E S Dシンポジウムウィーク」ということで、海外からのお客さんを招いてシンポジウムを行います。11月13日に筑波大学で開催しますので、もし先生方のご興味がありご都合がよろしければ、ご参加いただければと思います。ちなみに今年のテーマは、E S D Rice Projectの関係もありまして「食と環境の持続可能性」というテーマにさせていただきました。以上、本校ではこのようなかたちで、ユネスコスクール同志での交流ではないのですが、ユネスコスクールでの学びに他のユネスコスクールではない学校を巻き込みながら取り組んでいます。ご清聴ありがとうございました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

今野先生、ありがとうございました。

(4) まとめ

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

小学校、中学校、高等学校、3つの校種での学校間交流を含んだE S Dの取り組みにつきまして実践報告をしていただきました。私は校種は違ってもいくつか共通していることがあるなと思いながら聞いていました。例えば、子どもたちの学びが課題を設定して調べて発表するまで終わっていません。そして、その後の発表からまた新しい課題を見つけてそれを地域の人と交流したり、よその学校と交流したりするというように、課題発見、探求、発表のサイクルが1つで終わっていません。いずれもこうしたサイクルをさらに回していく中で色々な学校との出会いがあり、交流があり、協働が生まれっていくというカリキュラムになっていると思いました。もう一つは、交流を進めていくためには、E S Dを推進していく中で学校間の交流ネットワークを広げていこうという活動のコーディネーターやリーダーとなる先生方がいることが大切なのだなということも感じました。そういった人たちが様々なつながりを活用しながら学校間のネットワークを広げていっているところも共通して感じられたところです。

3つの学校の先生方の発表を聞いて、聞いてみたいことがいろいろあると思いますので、それにつきましてはこの後の分科会でご質問いただければと思います。

それではここで、本日は岡山市E S D世界会議推進局の浅井局長に来ていただいていますので、あと数カ月に迫っている世界会議について、どのような形で準備が進んでいるのかということや、先生方がどうかたちで参画できるのかについて紹介していただきたいと思います。それでは、浅井局長よろしくお願ひします。

○浅井孝司（岡山市E S D世界会議推進局）

皆さんこんにちは。少しお時間をいただいて、この秋に予定していますE S Dの世界会議、特に岡山で開催する会議について簡単にご紹介させていただきます。

お手元に「岡山E S Dプロジェクト」というパンフレットを配付させていただいておりますが、その裏表紙に「E S Dに関するユネスコ世界会議の概要」を簡単にまとめてございますので、そちらを参照していただきたいと思います。

岡山で開催する会議は「ユネスコスクール世界大会」「E S D推進のための公民館－C L C国際会議」「グローバルR C E会議」「ユース・コンファレンス」「教師教育に関する国際会議」の5つがあります。特に今日お集まりの方々に関係が一番深いのは「ユネスコスクール世界大会」であります。この

パンフレットの中ほどにタイムテーブルが示してありますけれども、10月には「ESD推進のための公民館—CLC国際会議」を開きます。CLCというのはコミュニティー・ラーニング・センターの略なのですが、地域の活動とかノンフォーマルエデュケーションに焦点を当てた国際会議になります。11月になりますと、ユネスコスクールの会議、ユース・コンファレンス、それからグローバルRCEという3つの会議がほぼ並行して行われます。

その後に、名古屋での閣僚級会合等がありまして、最後に再び岡手で「教師教育に関する国際会議」が開催さ

れます。これは去年までは予定されていなかったのですが、去年の年末に急遽開催が決まりました。教師教育といっても、いわゆる英語で言うとInstitute of Teacher Educationということで、要するに教員養成機関のネットワークの会議です。この「教師教育に関する国際会議」だけは、全く通訳はなく英語のみの会議になり、11月14～17日に開催されます。

「ユネスコスクール世界大会」は11月6～8日の3日間になっていまして、その中が3つに構成されています。11月6～7日の2日間が「高校生フォーラム」、それから「教員フォーラム」が7日の午後です。「ユネスコスクール全国大会」が11月8日になります。6～7日はホテルグランヴィア岡山、8日は岡山大学が会場になります。

「ユネスコスクール全国大会」での事例発表等についてはもう既に8月に公募が終わっておりまして、事例発表はどの学校が行うかというのも先行して決まりつつありますけれども、「ユネスコスクール全国大会」の参加申し込みはこれからなるようでございます。

ユネスコスクールの世界大会のうち「高校生フォーラム」と「教員フォーラム」は参加者限定になります。会場の大きさの都合で残念ながら、一般のオブザーバー参加はなしということになってしまいました。ただし、「ユネスコスクール全国大会」は例年どおりこの岡山大学を会場に多くの方々に参加していただくことができると考えておりますので、参加申し込みが始まりましたら是非積極的にお申し込みいただきたいと思います。このように、11月に岡手で会議がいくつかありますけれども、特に11月6～8日には岡山市でサイドイベントも企画しております。このサイドイベントについては一般の方々の参加が可能で、特に申し込みは必要ありませんので、直接、会場に行ってご参加いただけるとありがたいです。特に11月7日の午後に岡山コンベンションセンターの一角を使いまして岡山

のユネスコスクールの活動発表を行いますので、是非、ご覧になっていただきたいと思っています。また、11月7日の夕方には、文部科学省主催の「ユネスコスクール全国大会前夜祭」ということで、岡山プラザホテルを会場に、日本ユネスコ国内委員会会長、中央教育審議会会長の安西祐一郎先生の講演とレセプションを行うということを予定しています。以上のように11月7～8日に、ここは特に教員の方々にご参加いただけるプログラムが岡山で準備されています。そのほかにも、もし、お時間の許す方がいらっしゃいましたら、10月の「ESD推進のための公民館－CLC会議」にオブザーバー参加が可能ですし、その時にもサイドイベントを岡山コンベンションセンターで行いますので、そちらもご覧いただけるのではないかと考えております。愛知、名古屋で開催される国際会議はユネスコからの参加招待状がないと会場に入れないという参加者限定になるのですけれども、そちらでも色々なサイドイベントが企画されておりますので、それには参加ができると思います。

先程、筑波大学附属坂戸高校の今野先生が筑波で開催している高校生の国際会議についてご説明されていましたが、しかし、「高校生フォーラム」は、そこで行われているものとほぼやり方は似ているものです。ただし、規模がかなり大きくなります。「高校生フォーラム」では、世界33カ国の高校生のチームがやってきます。これに既に公募で決まっていますけれども全国7つの各地区代表と、大阪と岡山のチーム合わせた合計42チームが参加します。このフォーラムは筑波大学附属坂戸高校の実践と似た形式で高校生自らが運営を行うフォーラムになります。この運営を行うのは開催地岡山のユネスコスクールの高校生と、これまで2008年、2011年に高校生フォーラム、国際フォーラムを経験している大阪地区の高校生が協力して運営に当たってもらうことになっております。そのための準備セミナーを昨年何回か行ってございまして、高校生たちが一生懸命にその準備に取り組んでいるところです。ですから、本当はこの高校生フォーラムは多くの方々にオブザーバーとして見ていただきたい気持ちはあるのです。先ほども申しましたが、残念ながら、岡山にはそれだけの余裕のある会場がなく、参加者だけで会場がいっぱいになってしまうということなので、一般のオブザーバーの参加はごさいません。ただし、インターネットを使った配信を考えておりますので、そちらで是非ご覧いただきたいと思っています。

繰り返しになりますが、皆様に11月7～8日に岡山市に是非お越しいただいて、サイドイベント、前夜祭、「ユネスコスクール全国大会」にご参加いただきたいと思っています。よろしくお願いたします。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

浅井局長、ありがとうございました。それでは、以上で全体会を終了させていただきます。

4. ワークショップ

(第1分科会)「小学校における学校間交流を含んだE S Dのカリキュラム作り」

○司会 住野好久(岡山大学大学院教育学研究科)

皆さんこんにちは。これから小学校の分科会を始めます。この分科会は大きく2つの柱で進めたいと思っています。まず、大牟田の荒木先生に実践報告をしていただきましたので、それにつきまして質問をして荒木先生にお答えしていただく時間をとりたいと思います。その後は、ワークショップというかたちで進めていきます。今回の研修会は学校間連携を含んだE S Dのカリキュラムをどう作り、実践していくのがテーマです。そこで皆さんの学校でどのようにE S Dに取り組んでいるのか、また、取り組もうとしているけれども、なぜ、なかなかうまくいかないのかといった点について、実践交流を行い、今後、E S Dを充実させていくためにはどのような改善策があるのかということとを議論したいと思っています。

最初に、大牟田市立吉野小学校の桜を中心的な素材とした実践につきまして質問を受け付けたいと思います。まず、吉野先生のレジュメを見ながらこれ聞こうという質問事項を書き出してみてください。5分程度時間をとりますので、質問事項の整理をお願いします。

(作業)

○司会 住野好久(岡山大学大学院教育学研究科)

いかがでしょうか。一問一答ですと時間がかかりそうなので、いくつかの質問を受けてから荒木先生にまとめてお答えしていただくことにしたいと思います。それでは、最初に挙手をしていただきました先生から順にお願いします。

○瀬川照幸(広島市立幟町小学校)

よろしくをお願いします。広島市立幟町小学校から参りました。まず、「桜プロジェクト」について、この桜を中心にした取り組みは、いつ頃から始まったのですか。

○岡本順子(広島市立幟町小学校)

同じく幟町小学校の岡本と申します。今の質問と少し関連して、3つ質問があります。1つ目に、テーマというのは全学年で決められたものがあって、内容だけをその学年で検討していくのか、それ

ともテーマ自体を学年で決めるのかというのが1つ目の質問です。2つ目に、活動を仕組んでいくとかなり時間がかかっていくと思います。例えば中高学年だったら総合的な学習の時間が中心になって他の教科と関連付けているようですが、低学年などでは時間はどれくらいかけているのでしょうか。3つ目に、地域や学校間交流を進めていくうえで先生が感じられている難しさや課題になっていること、例えば経費や時間などの問題があると思うのですが、それらについて教えてください。

○田辺裕子（岡山市立第一藤田小学校）

岡山市立第一藤田小学校の田辺と申します。今日はありがとうございました。1点だけお聞きしたいと思います。地域との連携がやはり難しいのではないかと思います。うちの学校でも各学年で同じような方に少しずつ内容を変えてお話を伺うということがあるので、そのような地域の方々との連携の工夫や苦勞などを教えてください。また、それを継続していくための工夫はありますか。地域の方はかなり高齢の方も多いので、ずっとそれを持続していくのも難しいと思います。そのためには引き継ぎなども必要だと思いますので、そういうところもあれば教えていただきたいと思います。

○古家野美絵子（岡山市立第一藤田小学校）

同じく第一藤田小学校の古家野です。ありがとうございました。

最後の発信のところで他校との交流として、他県のユネスコスクールや海外のユネスコスクールと交流されているのですけれども、どういう経緯でその相手などが決まったのか、それは、子どもたちからの声から出てきたのか、また、交流時の課題などがありましたらお聞かせ下さい。

○板倉真由美（岡山市立第三藤田小学校）

第三藤田小学校の板倉と申します。キャラクターを作ったりするところで、子どもが大変意欲的に取り組んでいたところがとても参考になりました。ありがとうございました。先程の質問に関連するのですが、まず、国内のユネスコスクールや海外のユネスコスクールとの交流の内容を具体的に教えていただきたいと思います。また、市内の全ての学校がユネスコスクールに入られているということなのですが、同じ中学校区あるいは同じ市内の学校との連携や交流がどのようになされているのかというあたりを教えてください。それから、少し交流というテーマからは外れるのですが、学校で何年かE S Dを行い、発信をしたり、行動したりするところまではいくのですけれども、先程、発表してくださった先生方の中の課題にもあったのですが、それを学習したことで子どもたちの価値観がどう変わって、どのように生活に活かしていくのかという点は取り組んできてとても難しいと感じ

ています。学習して色々なことに興味を持つことや、学びが深まっていくことは確かなのですが、それが子ども自身の生き方や生活の中にどう影響して、どう変わっていくのかをとらえることがとても難しいと思っているので、もし何かお分りのことがありましたら教えていただきたいと思います。よろしくをお願いします。

○栗林有紀子（岡山市立第二藤田小学校）

第二藤田小学校の栗林です。聞きたい質問はほぼ出されましたので、追加するものはありません。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

了解しました。では、ここで一旦区切ります。荒木先生、よろしくをお願いします。

○荒木秀敏（大牟田市立吉野小学校）

たくさん質問にお答えする前に、実は私、何回かこの研修会に参加させていただいているのですが、ユネスコスクールとかE S Dの研修会に参加させていただくのはものすごく好きなのです。なぜかという、例えばよく研究発表会がありますね。算数科の研究発表会とか国語の研究発表会などです。私は体育が専門なのですが、算数の研究校に行き体育で発表したりします。そうすると協議会などで、とうていかなわないような取り組みをしている先生が、難しい専門的な質問をするのです。でも、このユネスコスクールやE S Dの研修会では、分からないことは分からない、しないことはしていません、分からない時には私はこうしているのですがどうしていますか、ということでお互いの違いを認め、相手を批判ではなく温かく迎えていただくのがうれしくて参加させていただいていますので、そのようなかたちで正直に答えさせていただきたいと思います。

1つ目は、「桜プロジェクト」についてのご質問でした。「桜プロジェクト」は実は昨年度からの取り組みです。はじめてから1年と1学期間です。本校を含む大牟田市の全学校がユネスコスクールに加盟したのが23年度の3月でしたので、実質、本年度が3年目、2年と1学期になります。本校は、昨年度から大牟田市の研究指定校ということで研究2年目になります。1年目はとりあえず環境教育を中心に行ってきました。例えば、本校には「なかよし池」という池がありましたので、その池をビオトープにしようということになりました。そして、その水が流れていった地域の川の水質はどうだろうか、その川の汚れが海につながって地球環境はどうなるだろうかということで学習を計画しました。例えば池の学習を4年生まで、川の調査等の川の水質については5年生、そして世界中のリサイクル、リユースについて調べて地球規模の環境を考えるのが6年生というように、環境学習は、校内

だけで取り組んできました。昨年度、研究指定を受けたこともありまして、国内外のユネスコスクール相互間のネットワークを介しての交流を重視しようということになり、さあどうしようかなということでも取り組んだのが、昨年度です。そのとき学校の中に桜の美しい学校や古い資料が残っていたのです。体育館の2階のミーティングルームに昔の大きい写真が張り出してあって、大変きれいな桜が校庭に咲いているのを見た時に、昔はこんなにきれいだったのだね。桜は昔と少し違うねというところから、子どもたちが何で昔はこんなにきれいだったのだろうかという疑問をもちました。紹介したように桜は本校の校章にもなっているのです。昔のうちの小学校は桜と何かつながりがあったのではないかなということで、学校の沿革等を調べていると、校章をデザインした方が当時の先生だったということが分りました。そこで、ぜひ、その先生に来ていただいて校章の意味や校章をデザインした時に込めた思いを聞こうということになりました。そして、もう一回開校当時に返って、自分たちの学校や校区または大牟田市を愛し、そして誇りに思っ未来へ向かってよりよいまちづくりをしていこうということで、昨年度から桜を一つのテーマにしています。

色々なテーマでの学習を先生方に紹介しましたが、本校が、全学年で取り組んでいるのは「国際理解」「エネルギー環境」「生命（いのち）」の3つのテーマです。「生命（いのち）」というテーマには福祉や地域学習を含んでいます。具体的には総合的な学習の時間の中をこの3つのテーマで大まかに区切ろうということでも取り組んでいます。ですから、例えば「エネルギー環境」というテーマのもとに、3年生は校内のごみ問題について、4年生はビオトープを使って、5年生はそのビオトープから流れ出た、または家庭から出た排水をたどって行って川の環境保全を学習するなど、全学年をこの3つのテーマで統一し、各テーマの中身は各学年で発達段階や、子どもの課題意識に応じて変えていくという進め方をしています。低学年につきましては、総合的な学習の時間がないので、主に生活科の中で、例えば、町探検をして吉野の町のよさをアピールしようとか、町探検をした時に、校区内の方たちとの交流を通して吉野の人たちのよさを知ろうということをしてしたりして、生活と学習とをつなげて行っていったところです。

次に、学校間連携や地域間連携の課題ということなのですが、交流が始まったのは正直いって昨年度からということですが、まず、何で交流するのかということ考えた時に、やはり成果の中でも言いましたように、他の学校と学習の内容を交流するにはやはり内容が共通していなければいけません。また、交流したことで高まった姿でさらに交流を継続していくわけですが、そういう相手校はなかなか見つかりません。市内の学校でも総合的な学習の時間は各学校の特色が多く出てきます。例えば桜をテーマにしているのは私の学校だけなのです。桜を通して地域や校区を見直していくということはあるのですけれども、なかなか共通点が見出せないということで、まずは自分たちが学習してきたこと

の発信をしようということになりました。そして、相手と調べたことの情報交換といいますが、掲示物の交換からはじめてきたところです。

交流する学校が見つかった経緯については、正直申し上げるとピンポイントです。私は、教頭という立場で各地域の色々な人材の情報や、市内の情報などが入ってきますし、様々な県から講師の先生をお呼びしてE S Dの研修会を開いていました。実は、「桜プロジェクト」で気仙沼の鹿折小学校とつながったのは、昨年7月に気仙沼市教育委員会にいらっしゃった、今は宮城教育大学の及川先生を講師に校内研修会で勉強した時なのです。その時に、この桜プロジェクトの事業を見ていただいてご指導いただいたのですけれども、せっかく植樹をするのならば桜で何か他の学校と交流したいという話を校長先生にしたわけですね。気仙沼市立鹿折小学校は吉野小学校と同じで桜が大変美しかった学校で、今度の震災でそれがほとんど燃えてしまったり、流されたりしてしまって桜はほとんどなくなってしまったということをお聞きしたので、すぐにうちの校長が鹿折小学校に電話しまして、桜を植えさせてください、交流しましょうということになりました。

奈良市立佐保小学校とはビオトープでつながりがあるのでありますが、実はこちらの学校の4年生担任等が奈良教育大学で実践発表等をさせていただく機会があり、その時にビオトープの実践発表したのです。そうすると、そこで、うちの学校でもしていますよ、うちのビオトープの写真を送りますから、そちらの写真も送ってくださいということになりました。本当にその場、その場の出会いです。ユネスコのホームページを見たりしながら色々他の学校の情報を集めてみますが、ここは交流できそうだとところがなかなか見つからないので、その都度こういう機会をお互いに生かしながら、今度交流会しませんかということで交流するようになりました。

海外との交流についてですが、発表の中でも少し触れさせていただいたのですけれども、吉野小学校の校区出身の方が、今、トルコの現地の学校に勤めておられるのです。その方が4年前、帰国された時に、私はトルコの学校に勤めているのですが、吉野小学校を見せてくださいということから交流が始まって、私とその方とでメールをやりとりしながら、今度こういう掲示物を送りますからトルコの子どもに見せてあげてくださいというように進めています。最初は、日本の折り紙や和紙など、日本文化に関する写真とか実物を送ったのです。すると、「トルコの小学生から日本は生のお魚を食べるそうですが本当ですか」「日本人の切れ長な目は素敵ですね」「日本に古い建物はありますか」などたくさん質問が返ってきましたので、6年生がそれに答えるかたちで「生の魚は大好きで、刺身と言います」「お箸で食べます」「トルコの人たちのぱっちりした目も素敵ですね」などのやりとりをしました。交流する時のスタンスとしてはあまりこちらが構えてしまうと大変になります。負担感ばかり湧いてきますし、継続もしていかないだろうと思います。同じ学習していたところには「うちで学習を

まとめたら送りますからお宅のを送ってください」「写真をメールへ添付して送りますから写真を送ってください」などできるところから始めていかないと長続きしないだろうと考えています。

それから、地域の人材につきましては、先程言いましたように私が教頭の職ということで地域の方との色々なつながりがありますので、教頭の仕事として何年生はこういう授業をしたいのですが、協力してくれそうな人材はいませんかと相談します。例えば、3年生は食育とのつながりで昔の伝統的なおやつ、日本のおやつ、吉野校区に伝わるおやつ作りをして、そのよさを見つけさせたいという学習活動がありました。それでは、近所のお年寄りを私が集めようかということで民生委員や老人会の方に連絡をとって是非来てくださいとお呼びしてお話をさせていただいたり、作り方を教えていただいたりしています。地域の方もずいぶん高齢化してきました継続させるのはなかなか難しいと感じています。ただ、希望的観測ですが、こういう「桜プロジェクト」の学習をした本校の6年生が卒業をして、中学生、高校生、また成人となった時、少しでも「あの時に小学校で桜をテーマに勉強したよね、学校でみんなで桜を植えたよね、見に行こうか」と言って見に来てくれたり、地域に帰ってきた時に、あの時に手伝いしにきた人が色々と私たちに教えてくれたから、今度は私たちも小学生に伝えることないかなと考えてくれたりするようにして、今の学校の卒業生が次につないでいけたらよいと考えています。お年寄りが増えてきましたので、同じ方が毎年関わることはなかなか難しいかもしれませんが、続けていけたらよいと考えているところです。

交流内容ですが、本当は、今日の中学校の実践報告にもあったように、一つの單元の中でずっと継続して、子どもが会議を開いたりとか、リアルタイムでも話し合いをしたり、意見交換をする場がとればよいのですが、やはり経費や時間の問題もありますので、今のところ、うちとしては学習した足跡をお互いに交換し合ひましょう、こういうことを学習しているから情報交換をしましょうというぐらいで、きちんと話し合って学びを高めていこうというところまではまだいってないということです。それはこれからの課題かなと思っています。市内の学校との交流につきましては、発表の中にもあったように小学校、中学校では毎年1月に「ユネスコスクール子どもサミット」というのを行って分科会等で発表しますので、子どもたち同士の情報交換とか発信の場があります。職員同士も毎月のユネスコ協議会で他の学校のことを知ったり、夏休みにはユネスコスクール研修会がありますので、そこで講師の先生からの話を聞いたり、各学校の担任が実践発表をしたりして、そういう場で交流をしているところです。

最後に評価です。本校の課題にもしていますが評価は難しいと思います。やはりESDが総合的な学習とどこが違うかという、自分たちが考えて、「そうだよ、環境を守らないといけないよね」だけではだめなのですよ。その後、では私は何ができるのか、私はどうしようかと考え行動すること

が大切になると思います。行動化と言われますけれども、なかなかその行動化が難しいのです。今の段階では、子どもにはこうした学習を通していろいろな資質が身についたり、高まったり、深まったりしていると思います。小学生段階ですので、今後私たちがこの子どもたちに伝えたかったこと、身につかせたかったことが、将来大人になった時に地球規模で考え、そして行動できるような子どもたちに育つはずだという信念のもとにしている段階です。小学校の本当に1年間とか4年間の学習の中で「この子の姿はこうだったね」「環境についてこのような行動ができたね」「地域をよくすることについてこんなふうによくでき出したね」ということまではまだ今のところは見えてきていないです。今後は、そこははっきりと効果を確認できるゆとりができればよいなと思います。全て適切に答えられたかどうか分かりませんが、以上です。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございます。随分、疑問点がなくなってきたのではないかと思います。次はこちらからご質問がありましたらどうぞお出しください。

○勝浦清吾（岡山市立平島小学校）

平島小学校の勝浦と申します。総合的な学習の時間が年間70時間ぐらいあると思うのですが、そのうちのどのぐらいこの「桜プロジェクト」にかけられているか教えてください。他にも防災など色々なテーマ学習をやりながらこのプロジェクトをされているようでしたし、発表を聞かせていただくと、かなり力が入った実践で、全学年で取り組まれているとのことですから、学年間での調整など色々な部分が大変だと思いますので、どのぐらいの時間を使われてこのプロジェクトをされておられるのかをお聞かせいただければと思います。

○古川治郎（岡山市立平島小学校）

失礼します。平島小学校の古川と言います。どうもありがとうございました。ほとんど聞きたいことは出たのですが、1点もう少し詳しく聞きたいことがあります。「ユネスコスクール便り」が月1回出るということなのですが、どのようにしてこれができているのかを知りたいです。大変だと思うのですが、色々な学校との連携も含め、どのようにされているのかが分かれば教えていただければと思います。

○早川泰文（岡山市立小串小学校）

今日はありがとうございました。小串小学校の早川と言います。先生は学校間ネットワークのご説明で「ユネスコスクール子どもサミット」を大牟田市内で実施しているといわれていましたが、その様子をもう少し詳しくお聞きしたいです。お願いします。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

内容などについてですか？

○早川泰文（岡山市立小串小学校）

そうです。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

はい、わかりました。

○長尾武志（岡山市立甲浦小学校）

今日は、ありがとうございました。甲浦小学校の長尾と言います。質問なのですが、「桜プロジェクト」というすばらしい実践があるのですが、それは子ども主体で実践されているのかどうかをお伺いしたいです。教師も関わっていると思うのですが、その場合、色々な学年の活動があって、それをまとめる役をしている子どもたちはどうやって選んでいるのか、運営委員会など何か色々な委員会があたっているとか、プロジェクトチームみたいなものがあるのか、などをお聞かせいただきたいと思います。

○内藤 薫（岡山市立政田小学校）

ありがとうございました。政田小学校の内藤です。今日の報告は昨年度の取り組みが中心ということでしたが、最初の発表の中で子どもたちの願いをもとに何ができるか話し合いを行って方向性を決めたということも言われていたのではないかと思います。ここでは昨年度1年間取り組まれたことをご紹介されたと思うのですが、今年の子供たちはどのようなことを話しているのか、そして昨年からは今年、それから来年とその活動は変化するのか、子どもたちが同じような活動ばかり続けていくのか、どんどん新しいものに挑戦していくのかに関心があります、去年のシステムでまだ実践されないところですけども、できれば教えてください。

それからもう一点は、ユネスコスクールフェスティバルというのをやっているということでしたが、保護者や地域の方を呼ばれて、各テーマに分かれてお店のようなかたちで進められているようにもみえるのですが、もう少し内容を詳しく教えていただけたらと思います。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

はい。それでは荒木先生よろしくお願いたします。

○荒木秀敏（大牟田市立吉野小学校）

はい。ポイントをなるべく絞ってお答えします。まず、最初は、総合的な学習の時間70時間の活動配分についてのご質問でした。時数は具体的には分からないのですが、この5年生の資料をご覧ください。これは研究のまとめなのですが、東京の江東区立八名川小学校の手島利夫校長先生がつくられたESDカレンダーはご存じですね。本校でもESDカレンダーを作っています。「桜プロジェクト」は先ほど言いましたように1学期の中盤から年間を通して帯で示してあります。5年生は川の調査隊、自然を守ろうというテーマ、また、12月ぐらいから未来の吉野っ子を招待しようというテーマで、次の入学生である新1年生との交流を通して、どのようにしたら喜んでくれるかと活動もしています。ただし、「桜プロジェクト」は5年生がメインになる活動ですから、全体の約半分ぐらいの時間はとっているだろうと思います。他学年も同じように、4年生はビオトープをメインにしていますので、ビオトープの学習が時数的には半分ぐらいかと思います。大きなテーマと、他の3つのテーマのうち2つは改築していくというかたちで取り組んでいます。

2つ目の「ユネスコ便り」の作成につきましては、資料の一番後ろに載せています。原稿の割り当てなのですが、左側半分は教育委員会の指導主事が担当しています。右側の各学校の実践が学校については各学校輪番で原稿を書いていただきます。それを集約して、「ユネスコ便り」にまとめるのはユネスコ担当者会で進めます。現在は、本校の校長が市内のユネスコ担当者会の会長ということで、うちの学校へ全部集まってきて、集約をし、担当者会の中で原稿を作って印刷して全校に配付するというかたちになっています。

大牟田市が行っている「ユネスコ子どもサミット」につきましては、資料に写真が何枚かあります。半日で実施して、各学校からの発表があります。大牟田市は以前から外国語活動を盛んにやってきたところもありまして、今年度の司会者はALTと小学校の代表1人、中学校の代表1人が担当します。各学校の取り組みを毎年7～8校ぐらいが発表し、間に英語のゲームを入れたりするなどの内容で、各学校の発表の場を大牟田市全体でつくっているということです。今度の11月には、うちの学校で「吉

野小ユネスコスクールフェスティバル」を行います。昨年度から土曜授業の一環として実施しているのですが、地域の方と保護者を呼んで午前中、半日で行っています。ワークショップやパネルディスカッション形式で全学級が体育館で実施します。まず、各学年で発表のテーマや使う機材、どのくらい広さが必要なのか、必要なパネルの枚数などを確認します。それを教務主任が集約しまして、大きく2つのグループに分けます。例えば1・3・5年生が前半部分で発表をする時には、2・4・6年生が1・3・5年生の発表を見に行くわけです。前半グループが終わると会場の設営を変えたり、パネルを入れ替えたりして後半は2・4・6年生が発表し、1・3・5年生が見に行くというかたちで、校内でのユネスコスクール活動として学年の発表をします。その中には、例えば去年は2年生は生活科でのおもちゃ作りを紹介したのですが、一緒におもちゃを作って遊ぼうというコーナーで作り方を教えて、そして一緒に遊ぼうねという、紹介していました。6年生になると自分たちでパソコンを使ってプレゼンテーションを作成し調べたことを発表したりします。地域の方や保護者の方が去年は600人ぐらい来られました。

もう一つは、5年生の「桜プロジェクト」をまとめています。「桜プロジェクト」は5年生中心の実践ですので、5年生が学習をしていく中でまとめています。例えば5年生のあいさつ運動もそのプロジェクトの一環ですので、企画委員会がするとかいうことではありません。5年生が、例えばあいさつプロジェクトや桜マップ作りなどグループで学習しますので、児童会などが実施しているのではなくて、5年生の総合学習の中で行っているということです。

最後に、去年からの「桜プロジェクト」との違いですけれども、資料には昨年度の活動も含んでいますが、報告した実践は、本年度の5年生が1学期に実施した部分を中心です。昨年度の部分は、発信、整理、分析をしたところですね。この煎餅販売をしている写真は昨年度のもので、11月に地域の文化発表会があるのですが、その文化発表会の時にお店を出させてくださいということで煎餅を販売しました。植樹というのは地区公民館の館長がうちにも公民館の前に1本桜を植えていいですとの許可がありましたので、昨年度の5年生がこの煎餅の売上金で1本地域に植樹をした時の写真です。

「夏祭り」「あいさつ運動」「サクライオン」は今年度の取り組みです。これは、昨年度の「ユネスコスクールフェスティバル」です。去年の5年生から取り組みがスタートしましたので、今年度の5年生には6年生との交流会の最初にもたせました。全部オープンにしています。私たちはこんなことをしたのですよ、こんな意味があったのですよというのを6年生が5年生に伝えました。今年の5年生には担任が、「あなたたちは何をやるの。去年の5年生はこんなことしたけど、あなたたちにできることは何があるかな」ということからスタートしましたので、同じ取り組みもあります。でも、例えばサクライオンとか、あいさつ運動は今年から始まりました。八名川小学校の手島校長は、E S

Dで子どもたちの心に火をつけなさいとよく言われるのです。ESDでは、最初に、子どもたちに火をつければ、後はどんどん燃え上がっていくので、火をつけるのが大事です。基本的にやはり去年までの6年生、去年までの5年生が行ってきたことをオープンにして、去年の先輩はこんなことしたよ。では、あなたたちは今年はどうしますか。先輩の活動を取り入れて同じことをしてもいいし、新しい活動をしてもいいのです、自分たちができるところを考えさせることが大事かなと思います。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございます。では、こちらからご質問をどうぞお願いします。

○山崎 均（岡山市立建部小学校）

建部小学校の山崎です。聞こうと思っていた質問が次々出ています。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

もういいですか。

○山崎 均（岡山市立建部小学校）

はい。

○麻田邦彦（岡山市立建部小学校）

建部小学校の麻田です。今日はありがとうございました。1つだけお聞きしたいのが、この取り組みの最後で桜を守るために自分にできることということのほかに、うちの学校でもっと誇りにできるようなものもあるのではないかとというように視野を広げようというところ視点を持っていかなかったのかどうかということです。

○浅野智宏（岡山市立三勲小学校）

三勲小学校の浅野です。今日はありがとうございました。本校も「伝統文化」をテーマにしているので、海外との交流にとっても興味があります。そこで、トルコのことを教えていただいたのですが、カナダとシンガポールのことも教えていただければと思います。

○手塚美代子（佐賀市立本庄小学校）

今日はどうもありがとうございました。写真見せていただいて本当に子どもたちも無条件に桜というのは自分たちと一体的になっているのだろうなと思っています。ある桜師の方が、桜というのは1年間どう育てたかで花の咲き方が違うとおっしゃったのですね。だから、黙っていてもいいものではなくて、育て方で毎年違ってくる。このプロジェクトをされて子どもたちが桜の世話をどうされて、桜との関わりがどう変わったのか、そのあたり教えていただきたいというのが1点目です。

2点目ですが、ESDを取り組むときいつも本当にこれが持続可能な未来につながる力となっているかというのがいつも不安なのです。授業をしていく上でどうやって子どもたちに力がついたかをきちんと見とっていくということが重要な一つの課題になってこようかと思うのですが、この「桜プロジェクト」をされた時に子どもたちのどういう力が伸びたのか、1年間見とられて、能力が伸びたのかなというところがあれば、それを教えていただきたいと思います。プロジェクトのストーリーマップの中に総合と教科を関連させながら具体的にやっていますというお話でした。やはりESDは総合だけでもだめだし、資質能力の育成をしっかりとあわせながら進めていくということが非常に難しいところかなと思います。この取り組みでは、内容と方法という視点と評価を関連づけるような仕組みがつくられています。資質能力というのがとても大事になってくるのではないかと思います。そのあたりはどのようなのか教えていただきたいと思います。

○荒木秀敏（大牟田市立吉野小学校）

最初の質問の桜の他にはということについてですが、桜を窓口にということで活動を行っていますので、子どもたちに、初めに「吉野小学校で誇りに思うことは何ですか」と尋ねても答えが出てこないのです。ですから、やはり、まずこちらからある程度、提示することで課題意識を持たせたのですが、確かに桜のほかにも自分の学校に誇りをもてる子を育てるのが私たちの役目だろうと思っています。ただ、現時点ではその他に子どもたちからこれだというところは見つかっていません。

カナダとシンガポールとの交流は「ジャパンアートマイル」の活動によるものです。そこで海外の学校を紹介していただいて、大きなケント紙で壁画を作成するというものです。その壁画は日本の学校が半分作成し、相手校にそれを送り相手校が半分つないで作成します。真ん中から分かれているのです。この上の写真では、右側半分が日本ですね。うちの学校の子どもが書いた富士山がありますし、その下に小さく桜が咲いているのです。左側半分がシンガポールです。下の写真では、逆に左側半分に桜があつて日本の学校、右側半分はカナダの学校の児童の作品です。

この取り組みは、大きな絵を1枚描くのですが、その絵の完成に至るまでにパソコン上でサイトが

できますので、うちの学校と例えばシンガポールの学校とで英語で動画を交換したり、メールを交換したり、色々な交流をしながら、絵の構図をどうしようかなど、子ども同士も、また担任同士も打ち合わせをしながら進めていくという取り組みです。

本年度も6年生が1クラスこれに応募して、相手校がメキシコの学校に決まりましたので、今度はメキシコの学校と平和について何か考えられないかという交流が始まったところです。インターネットで「ジャパンアートマイル」と検索されると出てきます。本年度の締め切りは過ぎていると思いますけれども、ご覧になられるとよいと思います。

次に、桜に対する子どもの姿についてです。実は先ほどの桜は7月に植樹したのです。及川先生が来ていただいた時に一緒に植樹式をしたのですけれども、それからすぐに夏休みになりました。桜は本来9月か10月に植えるのですけれども、7月に植えると夏休みに水やりをしなければいけないのです。でも、子どもたちはすごかったです。毎日校庭へ出てきました。そして、近くに水道がないからバケツで何杯も水をくんで毎日毎日交代で桜に水をあげていました。今年度の春に桜が、植樹した桜がぽつぽつ咲いた時はもう大喜びで、写真を撮ろうと言って写真を撮って相手先に送ったりしていました。桜に対するそういう思いというのは、やはり子どもたちのそういう行動からは出てきたと思います。そして、5年生が収益金を上げて買った桜の苗木を6年生に卒業の祝いとして贈ったのです。6年生は仲よし桜と名付けて卒業記念の桜植樹をしました。卒業後に何回か「桜はどうなっていますか」、「桜の木の下に集まる約束をしたのですよ」といって卒業生がその桜に集まってきています。私たちは、将来、その子たちがこの桜の周りに集まって、地域の方も集まって一緒に地域のことを考えられるようになってほしいなということを思っています。

最後に、評価は難しいと思っており、課題として取り組んでいきたいと考えています。ストーリーマップ自体も、昨年度自分たちが実践した単元を足跡として残そうということで、子どもたちの思考を発展させるために各教科の取組との関連を内容面と方法面から意図的に仕組んでいくように意図的につくってみたという段階のものです。本年度はこれを使ってまた見直しをしていかなければいけないと考えています。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。私たちは吉野小学校、荒木先生からたくさんのことを学ばせていただいたと思います。それでは、今度は私たちの学校で学校間の交流を豊かにしていくためには一体どうしたらいいのかということ、自分たちの学校の実践を振り返りながら交流ができればいいなと思っています。

そこで、今うちの学校は、学校間交流をやっているよという学校はどれぐらいありますか、挙手してみてください。形は色々なかたちがあると思います。隣の学校とやっているというのもあれば、他県ともあると思いますが、どれぐらいありますか。藤田中学校区グループはそうですね。小串小学校もされていますね。

まずは、取り組めている学校は何で取り組めているのだろうというポイントを出してほしいと思います。それから、取り組めていない学校は何が障害になっているのだろうというポイントを出してもらいたいと思います。そこで、取り組めている学校は黄色い付箋紙に、「こうだからできたのだ」「こういうところがポイントだよ」など、学校間交流を行うための知恵みたいなものを書き込んでほしいと思います。取り組めていない学校は、赤の付箋紙に、「こういうところで困っている、こういうところが障害である」というのを書き込んでもらいたいと思います。すると取り組めていない学校の問題に対して、取り組んでいる学校ではこういう工夫しているという回答があるかもしれません。これから付箋を回しますので、取り組んでいる学校は黄色、取り組めていない学校は赤で、1枚の付箋に1項目で書いてみてください。5分ぐらいとります。

(作業)

○司会 住野好久(岡山大学大学院教育学研究科)

それでは、みなさんにはこのテーブルの周りに集まってもらいます。ここはみなさんの共通のテーブルです。まず、ここに交流ができていない学校から、うちの学校はこういうことができていないから取り組みが進んでいるのだと説明していただきながら黄色の付箋紙を置いていってもらいます。その後、取り組めていない学校から、その黄色の付箋紙との関係を考えながら関係がありそうなところに赤い付箋紙を置いてもらいます。それらがどう重なるのか、重ならないのかは、出してみないとわかりません。それではこのテーブルが見える位置に皆さんご移動をお願いします。それでは、黄色い付箋をお持ちの方から順番に付箋紙を机上に置いて説明をしてください。お願いします。

○藤田中学校区の参加者

藤田中学校区は、まず学年初めに各校の担当者が集まって1年間の計画を立てています。

○藤田中学校区の参加者

同じ藤田中学校区なのでですけど、中学校と小学校は各学年で目指すことなど活動テーマをそろえ

ています。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

なるほど、活動テーマがそろっているし、それに関して計画を一緒に議論する時間や場が準備されているということなのですね。

○藤田中学校区の参加者

担当者だけでなく、小学校には各学年会があり、その学年の先生たちが集まって情報交換をしています。計画の時だけではなく、2月には公民館で地域連絡会の中で各校からそれぞれ実践発表として子どもたちの発表と担当者の発表を行う機会が持たれています。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

こちらでは中学校区として一緒にやろうという仕組みがもうできているし、プラス地域公民館という、かたちがもう整っている感じがしますね。

○瀬川照幸（広島市立幟町小学校）

本校は、ユネスコスクールになる前からなのですけれども、平和学習を中心に取り組んでいて、平和学習をしている東京の学校が、広島に修学旅行で来られた時に本校を訪れて学年同士が交流をすることを続けています。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

修学旅行で来た学校とのつながりから始まったというわけですね。

○早川泰文（岡山市立小串小学校）

小串小学校は、県北の西栗倉小学校と交流して3年目になります。最初は川つながりでユネスコスクールではないのですが西栗倉小学校が吉井川沿いの学校に色々と呼びかけて交流が始まりました。当初は何校もあったのですが、そのまま続いているのが小串小学校ということです。

もう一つ、大きいのが支援してくれる人や団体がいることです。多くの発表でお金のことが出ていたと思うのですが、旭川ロータリークラブという団体がバス代などを支援してくださるので、年1回こちらが向こうに行き、向こうがこちらに来ることができています。それができているので、年

間行事予定表に年2回位置づけています。この活動は3・4年生が行っています。小串小学校は3、4年生は複式学級で、向こうの3・4年生は単学級なのですけれども、一緒に来て交流しています。私はずっと高学年しか担当していませんが、高学年の場合は対外的な活動も色々と多いので、中学年ならば高学年のようにできるのかなという感じはしています。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ここは学校と学校をつないでくれる川があったり、学校と学校をつないでくれる団体があったりという環境がうまくつながっている感じがしますね。

まだ他に黄色の付箋はありますか。ありませんか。

では、ここに赤の付箋紙を、黄色の付箋紙との関係を考えながら置いてください。別の関係も考えられるとは思いますが、ひとまず説明しながら置いていってください。

○参加者

うちの中学校区はしていることがばらばらなので、交流することのメリットが見えていません。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

なかなか、黄色の付箋紙のようになりにくいわけですね。

○参加者

はい。

○参加者

他の学校が取り組んでいることがあまりよく分かっていません。自分のところのことだけを考えると、交流のメリットがまだよく分からないですね。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

はい。続いてお願いします。

○参加者

同じです。活動内容が合致しないことが難しさです。

○参加者

仕組みづくりに対する色々な条件整備が難しさです。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

集まる時間や、計画等の時間、人、ゆとりがないということでしょうか。

○参加者

人材育成ですね。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

担える人がいないということですね。

○参加者

はい。

○参加者

E S Dの担当者と連携がうまくいっていないということと、他校と交流する意識が薄いということが課題ですね。交渉するのに手間がかかることや、交流のために時間などがうまく使えないということがあります。交流というと他校を訪れたり、他校を呼んだりするという意識が強いので、お金がかかったりするのではないかなという点で少し難しいのです。それから、カリキュラム作成が毎年行われずにあまり更新されずにそのままやっているのも難しさでしょうか。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

何年も同じような取り組みをするようになって、作り替えられていかないというわけですね。

○参加者

それは交流を大層なことと考え過ぎていたことによると思います。もっと簡単なことからでもできるのだなと思いました。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

成果物を送るところからでも交流はできる、でもなかなかそうは考えにくかったというわけですね。

○参加者

中学校区内でも交流を行うような計画が全く出されていないということと、交流のための組織が発展してきていないということがあります。それから、うちは単学級の学年が多いので、一人の教員が全ての単元を行うので、色々なところから人材情報が得られにくいということもあります。

○参加者

同じなのですけど。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

同じところに貼っていただければよろしいです。どのような感じですか。

○参加者

推進者がいないということです。また、教員の意識も負担感ばかりあって効果が少ないというものです。あとは、交流相手を探すことに大変さがあるということと、経費や時間の問題とシステムの問題ですね。

○参加者

海外の学校と交流するにあたって、言葉が通じないのはなんとなく恥ずかしいということがありません。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

これぐらいですか。持っているものは全部貼ってください。もういいですか。同じなら同じで良いので全て貼ってください。

これをみると、まず、交流を大層なものに考え過ぎているという感じがしますね。交流にふさわしい実践があってこそ交流するというふうに考えてしまうようですね。また、交流のための仕組みができていない学校と仕組みができていない学校、支援してくれる人や組織がある学校と、そうでない学校という学校間の格差みたいなものもあるようですね。やはり交流できていないところの最大の問題は、

教員の意識ということですね。教員が交流することの必要性や、交流が子どもたちにとってどのようにプラスになるのかというところに確信が持てていないということがあります。また、意識はあって、大切かもしれないと思っているけれども、ハードルを非常に高く捉えているため、なかなかその一歩を踏み出すのが難しいという状況が見えてきています。

学校間で一緒に議論をするという藤田中学校区グループなどは、どうしてそれができたのでしょうか。できていないところがたくさんあるにもかかわらず、何がポイントだったのか、そしてそれが今も続いているのはどのような理由があるのでしょうか。

○板倉真由美（岡山市立第三藤田小学校）

そもそも藤田地区の地域連絡会、E S D地域連絡会が公民館主体で立ち上がって、そこに学校が入りました。今は、この組織に地域の重鎮の方たちと協働学校の役員の方々などが入られていて、年2、3回ぐらい会合があります。最初にこのような活動をしますというのをお知らせしたりする広める会、それから最後にはE S D実践発表会があります。

○藤田中学校区の参加者

地域の方たちは、40人ぐらいが来られます。

○板倉真由美（岡山市立第三藤田小学校）

藤田地区は農業は盛んですが、している農業は地区によって本当に違いますし、同じ小学校でも、第一、第二、第三藤田小学校で学校の様子も全然違うのですが、あまり揃えないようにしよう、無理をしないようにしようということを取り組んでいます。このような子どもたちを育てて中学校に送ろうという目標だけを揃えて、その目標への迫り方は学校別でいいよねというようにあまりそろえないことで続いているのかなと思います。あまり揃えすぎると結構無理がくるので、活動を持続可能にするためにはそれぞれがしていることをしていきながら、目標に向かってそれぞれの学校で取り組んでいきましょうというかたちで進めてきました。そうした中で、今年は単元構想をしようという、もうワンステップ進めた感じです。一緒に取り組みをされていてよいことは、例えば、5年生は食と農業がテーマなのですが、近くの興陽高校という農業高校と一緒にフィールドワークを行っています。地域の農家の方々と子どもたち、5年生全員で同じ日に一斉にインタビューに行っています。それはそれで日程を合わせるのは大変なのですが、特に、うちなどは単学級でそれこそ担任一人なのですが、一斉に他の学校の先生と一緒に進めるということでは少し負担が軽減されるという面もある

のです。

それから、持ち回りで事務局の学校もかわっています。したがって、興陽高校などとの交渉も、今年はこの学校が窓口でしょうというのが持ち回りになっているので、大変な面もあれば軽減されることもあります。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

単学級だから少し交流がしんどくて難しいかなというのもあるのですが、共同するから持ち回りで負担軽減になるというよさもあるというのですね。そのあたりが教職員の意識の持ち方になり、連携することで負担感が少なくなるような仕組みづくりが藤田中学校区はうまくできているということですね。

他の学校と連携をしている学校ではそういう共同意識をどのようにつくってこられたのですか。小串小学校などは、連携をしようという必要感などをどう共有されていたのですか。

○早川泰文（岡山市立小串小学校）

当初のことは、私はいなかったもので、分からないのですけれども、相手からの呼びかけに対して、連携の必要性が分かっているようでよく分かっていないところもあるのです。ですが、今年は3・4年の担任が連絡をとり合って1学期は向こうから来て、2学期にはこちらが行くということになっています。相手の学校がまた続けていこうというようなことは言っているので、もうしばらくは続くかなと思っています。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

何でみんなそのように続けようと頑張れるのですか。

○早川泰文（岡山市立小串小学校）

3・4年生が交流活動をしていて、5・6年が発信できていないので、5・6年は去年3学期にしている活動を3・4年生に伝えようとしたのです。今度11月7日に発表するのが3年生なのですけれど、そこに、他の小学校や他の人たちに発表する喜びというのをなかなか味わったことがない6年生も行くので、そこで6年生がどう思ったかというのを聞いて、子どものほうから自分たちも他の学校への発信もしたいなどの意見が出たら本物だなと、今は思っているのです。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

子どもの変化が実感できるのは大きいですね。他の学校の生徒たちの前で発表して、どきどきしたけれど終わった後には頑張ってよかったというように子どもの育ちが実感できるようになると交流活動のメリットが実感できるのでしょうか、活動をやる前にはそういう実感はなかなか持てないの、なかなか最初の一步が踏み出せないのかなという感じもしますが、そのあたり荒木先生どうですか。

○荒木秀敏（大牟田市立吉野小学校）

吉野小学校も、まだそこまでは本当は行ってないのです。大牟田市が交流会など情報交換会を実施しているのですけども、中学校区内でここまで組織もきちんとされて実施しているというのはものすごいことだなと思います。吉野小学校は昨年度から交流を始めて、昨年度末に1年間の取り組みを相手校に送って、返事が来るというぐらいの取り組みですので、それが本当に必要かといったらまだ分かりません。ただ、やる前に必要かどうかということ論議するよりも、まずやってみることが大切だと思います。

実は去年、私は桜を気仙沼まで植樹に行ったのです。気仙沼で円卓会議というのがあって、そこで発表するというのもあったのですけれど、相手校に桜を送って、教頭の私が植えに気仙沼まで行ってきました。そういうことからつながっていく中で、子どもたちの姿としては今度、気仙沼の同じ5年生とこういう活動をするよと言った時、やはり相手意識があるのです。桜の花が咲く時期は九州と気仙沼では違うよね。では、その時期について調べてみようかということになります。相手意識と目的意識は実際に活動してみないと分かりませんので、する前から何かないか、必要かなどと言う前にまず始める、何となく始めるということが先なのかなと思います。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

例えば海外との交流などで言葉の問題はどういうふうに乗越えたのでしょうか。

○荒木秀敏（大牟田市立吉野小学校）

はい。言葉は中学校の英語の先生に頼みました。それから、英語の堪能な地域の方にも協力をお願いしました。大牟田市ではユネスコスクールの加盟申請書は自分で作ったのです。どうしようかあと行って、最初は翻訳ソフトを使おうとしましたが全然だめなのです。そこで、中学校の英語の先生に頼みました。ですから、言葉の問題は何とかなるかなと思っています。

また、学校にALTの先生が来られていますので、ALTの先生にちょっと英訳してくださいなどをお願いをして、使える人材は誰でも使うことをしています。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。近くの学校との交流は仕組みが学校を超えてできると動きやすい。それを学校だけでやるとなかなか難しいから、学校をつないでくれるような公民館や団体など、間に入ってくれる組織の協力があるとそういう仕組みというのができやすいのだということでした。それから、意識の問題では、やはり交流というとても大変だ、すごい交流をしないといけない、準備からずっと一緒にしなければならぬなどと心の中に壁をつくってしまいがちなのですが、そんな大層にしくなくても、成果物を送るというようなところからでも交流はスタートしますし、そういう交流でいいのではないのかという意識を持つということが何か改めて大切なのだということが共有できたかなと思います。今日は皆さんの現状を出しながら議論することができましたし、荒木先生には大牟田の情報をたくさん聞かせていただきました。ありがとうございました。それでは、これでワークショップを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。



(第2分科会)「中学校における学校間交流を含んだE S Dのカリキュラム作り」

○司会 川田 力(岡山大学大学院教育学研究科)

それでは、時間になりましたので第2分科会を始めさせていただきたいと思います。この分科会のファシリテーターをさせていただきます岡山大学の川田と申します。最初に、この分科会では、学校間交流を組み入れたカリキュラム作りというような話を中心にさせていただきたいと思うのですが、少人数でもございますので、自己紹介をしてから進めていきたいと思います。

まず、この紙を縦に4つに折っていただいて、一番上に所属を、二番目にお名前を書いていただいて、三番目にはE S Dをやっている困っていることを、最後のところにはE S Dで学校間交流を取り入れる時の難しさについてお書きください。三番目の困っていることはE S D一般で困っていることを、一番下には、学校間交流に特化して困ったことをお書きいただければと思います。少し時間をとらせていただきます。

(作業)

よろしいでしょうか。そうしましたら、私から鈴木先生のほうに順番に、この用紙を用いながら自己紹介を兼ねて困っていること等お話しさせていただきたいと思います。

私は、岡山大学のE S D協働推進室で、ユネスコスクールの支援等をさせていただいています川田と申します。本当は、教育学部の社会科教育で人文地理学を専門としているのですが、岡山大学がE S Dの理念を有した教員をつくるということを教員養成の重要な理念の一つに上げているので、そこに協力させていただいているということです。地理学というのは、環境や社会や文化、あるいは世界のことや国内のことなど、非常に多面的に対象としているので、私に白羽の矢が立ったという感じです。ですから、もともと私はE S Dの専門家ではなかったのですが、このために色々なところでE S Dの活動を見させていただいたり、専門家の方から直接お話をうかがったりして最近はいよいよ色々なことを、理解できるようになりました。

今課題であると思っているのは、ユネスコスクールは、ユネスコスクールネットワークプロジェクトということで、よい取り組みをしている学校を認証するという取り組みではなくて、ネットワークを活用してよりよい教育を進めていこうという取り組みなので、その中で、学校間交流のコーディネートをどういうふうにしていったらいいのかということです。1つの学校の取り組みをサポートすると、学校の中に入って行って助言することで対応できるのですが、交流ということ

になると、相手方の学校に対しても配慮しなければなりませんし、それぞれに交流の目的やニーズがあると思いますので、難しいなと思っています。今日も是非、先生方のお話を聞きながら、方向性を見出せたらよいなと思っています。

今日は、鈴木先生に非常によいご報告をしていただいたので、目が開かれた感じなのですが、交流の意義をどのように理解していただくのかというのが非常に難しく、学校間交流しなくてもできるのではないのか、あるいはそれよりもっと効果的なことがあるのではないのか、それより先にやることがあるのではないのかなというようなことをよく言われたりするので、なんとかしてそのネットワークを活用した学習のよさを理解していただくことが大事なのかなと考えています。そのあたりもあわせて課題だと思っていますので、そうしたお話もお聞きしたいです。よろしく願いいたします。

○鈴木 萌（多摩市立多摩永山中学校）

先ほどはどうもありがとうございました。多摩市立多摩永山中学校の鈴木萌と申します。本校が初任校なのですが、赴任して今年で7年目になります。今、中学3年生の担任をしています。社会科担当です。私は、先ほどの発表でも色々と生意気言わせていただいたのですが、まずESDのところでは、やはり多忙であるということです。公立中学校の教員は、私もそうなのですが本当に忙しく、明日も9時から部活だなどか思いながらここにいるわけです。このように多忙をきわめる中で、つい目の前のことをこなすのにはいっぱい、意識がESDというところに常にあるかと問われると、うんとなってしまうところがあるということです。それから、本校の研究もそうなのですが、自分自身が研究主任をさせていただいて感じるのは、やはり先生方の間でも本当に意識に差があるということです。別にそれがいい悪いとかいうことではなく、川田先生もおっしゃったように、それよりもこちらのことのほうが大変だから等、それぞれにお忙しく、仕事がおありの中で、ESDを全校で取り組んでいこうという目標であるので、どう共通意識と共通理解に持っていくのかということが課題です。

それから、学校間交流で困っていることとしましては、先ほど上げたスケジューリングです。今回、先ほど発表で土曜日と強調させていただいたのですが、交流ができるのは土曜日の午前中なのです。結局やはりそういうふうになってしまっていたというようなこともあります。それが平日で、例えば6時間目に総合学習の時間となった時に、やはり色々な障壁があって、それを超えていけないといけないのだらうなということもあります。あとは、負担感ですね。担当になった先生の負担感というのも正直なところありまして、かといって組織的に動くというように自分の発表で言わせていただいた

ものの、なかなか回っていかない現実があります。それから、目的意識については、学校間交流をしたい、してみたら面白そうだというのはあるのですが、それが、どう生徒のためになるのかはまだはっきりとつかめていません。きちんとこちら側が目的意識を一貫して持っていないとぶれるということではないかなと思ひまして書かせていただきました。以上です。

○永守志帆（岡山市立上南中学校）

岡山市立上南中学校に努めております永守といいます。上南中学校は3校目で、去年までは福南中学校というところにいました。そちらのほうでもE S Dの取り組みをしていたのですが、今回初めてE S Dの担当ということで、いろいろ悩んでいるところです。まず、困っている点としては、中学校区内での連携がうまくできていないということがあります。上南中学校は田んぼの真ん中にある小さな学校で、農業を中心とした取り組みなどがあるのですが、そんな大それた取り組みでもなく、小学校でしてきたことを、中学校でも似たようなことをしていることになっているところが少し課題かなと思います。もう少し連携ができれば、もう少し発展的な学習が進められるのではないかという思いはあるのですが、日程などの都合もありまして、小学校での取り組みを受けて中学校で発展的にすることができていないというのが課題です。

それから、学校間交流のことにつきましては、鈴木先生がおっしゃっていたように、日程の調整がうまくいかないということがあります。中学生になると、やはり部活動であるとか、行事以外にも試合の都合などがあり、どうしても足が前へずっと出ないところがあります。本校はすごく小さな学校で学年が2クラスしかないので、ほとんどの教員が学年をまたいで授業に行っているような、教科も学年もまたいで何とかぎりぎり時間割を作っているようなところなので、1年生が活動に行こうとなった時に、時間割の都合がうまくつかないというのが壁になっているのではないかと思います。交通手段についても課題です。先ほど見せていただいたようなテレビ会議などであればいいと思うのですが、なかなか準備したりするのも大変そうだなと思いました。近隣の中学校に行くのはどうだろうと思った時に、引率や交通手段など皆さんはどのようにされているのかというのをお聞きしたいなと思います。よろしくをお願いします。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

岡山市以外からの先生も出席されていらっしゃるかと思うので、少しご説明しておきますと、岡山市は小・中学校が連携したユネスコスクールの加盟に取り組んでいまして、今、永守先生がお話しいただいたように、中学校区の中の小学校と連携しながら、地域協働学校の取り組みとユネスコスクー

ル・E S Dの取り組みを進めていこうとしているということがあります。そういうようなことでの連携が少し難しいというようなお話だったと思います。

○ジャクソン明子（岡山市教育委員会指導課）

岡山市の教育委員会の指導課から参りましたジャクソン明子です。実は、私は人権が専門で、そちらのほうは勉強もしておりますが、E S Dのことは始めたばかりなのです。先ほど、3人の先生方が発表されているのを聞いて圧倒されて、ああすごいな、奥が深いなと思いながら聞いておりました。これからまだ勉強することも多々あるのですが、また頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

○平井秀尚（岡山市教育委員会指導課）

岡山市教委指導課の平井と申します。学校間交流で何よりも大切なのは持続性だと思うのです。私は、E S Dではなくて、色々と学校間交流をしたことがあるのですけれど、いつも途切れてしまいます。私が転出したらなくなるとか、前の人の流れを切ってしまうとか、そういうことがありましたので、どうやって持続するのが課題です。要因は色々あると思うのですが、一番は個人的な努力でやってしまうということかなと思います。個人的なつながりでスタートしてそれが広がっていないと続きません。もう一つは、オンラインだったらまだよいのですけれども、オフラインで交流しようと思うと、特に県外の学校と交流しようと思うと、お金をどうするかという問題になります。国外だともっとですね。私は東京の秋葉原の学校と交流したことがあるのですけれども、ある企業の丸抱えでやったので、結局、金の切れ目が縁の切れ目になってしまったので、どうやって持続をしていくかというのが大切だなと思っています。

それから、特にオフラインの時に、子どもたちが本当に話したいテーマかということ子どもたちとよく詰めておかないと、結果として話したくもないことを話して机上の空論で終わってしまうことになるので、そのあたりをどうしていくのかということも私自身の課題です。よろしくお願いします。

○植山智恵（岡山市教育委員会指導課）

失礼します。岡山市教育委員会指導課の植山と申します。よろしくお願いします。私は、もともと小学校の教員です。指導課に入って、E S Dの担当を今年から担当しているのですが、小学校の時にも、ちょうど10年前、この付近の津島小学校というところに勤めていて、E S Dの取っかかりとして、色々自分なりに考えてきたのですけれど、なかなか難しいなという思いは、そのころも今も

やはり感じています。大きく難しいなと思っているのは、学校全体で取り組むために何が必要なのかなということです。誰かが中心にやっていけばいいというものではなくて、どの子どもにもしっかりとつきたい力を考えながらしていくと考えた時に、学校全体の組織づくりであったりとか、目指す子ども像のことであったり、そういうことがちょっと難しいなとまだまだ思います。

それから、ネットワークについては、岡山市は今年から市外、県外の学校とネットワークを作っていこうという予算をとり、取り組みを始めています。ただ始めるということで、色々とやりたいと思ったださっている学校を中心に「やりませんか」と声をかけたりしています。それから市外の学校から岡山市の学校にもアプローチがあります。岡山市にアプローチがあり、その学校と話を進めていく時に、先ほど先生がおっしゃられた目的が最初に学校同士でしっかり話し合われていないとつながらないし、その後が持続的になっていかないというようなことがあるので、取りかかりというのは大事だなと思っています。大事だなということのもう一つは、取りかかろうとしたい気持ちです。先ほど多忙感など、先生方は色々なことをされているので、交流をやりたいと思えるネットワークづくりというのはどういうものなのだろうなというのを、日々考えています。よろしくをお願いします。

○中島陽子（岡山市ESD世界会議推進局）

岡山市役所のESD世界会議推進局で働いております中島です。もともとは岡山市教育委員会におりました。昨年度より、ESDの世界会議推進局で、主に高校生フォーラムの準備を、切羽詰まってやらざるを得ない状況です。生徒たちはよく頑張っています。

課題としては今の局に移ってよく思うのですが、やはり学校の世界は狭いなということをすごく感じます。今はいわゆる行政の方がほとんどの職場で仕事をしているのですが、ESDの活動を外部に向けて発信しましたと学校の先生方がよく言われるものの中に、保護者への発信であることが多いです。今は保護者は内部であると思うようになりました。学校の社会の中にいた時には、保護者への発信も十分外部への発信だと思っていたのですけれども、色々な人たちと話をしたり、仕事をしたりしていると、学校は狭い、学校は外部に全然発信してくれないという声を聞きました。確かにそうだなと思います。保護者はやはり子どもの親だったりするわけですから、地域に向けて発信するとはどうということなのだろうということをよく考えるようになっていきます。

そんな中にありながら、私たちも根本的にESDはすごいことなのだ、教育の本質なのだといったりしてまわるのですけれども、鈴木先生が言われたように、学校の現場はそれどころではないのが現実です。そうした温度差をいかにうめていくかも課題です。ESDをやっていくことによって自分の力もついたと言われる先生方もおられますけれども、学校としてのカリキュラムの継続になってい

るかがポイントだと思います。特に中学校の場合、学年間ですごく温度が違ってくると思うのです。この学年にはすごくマッチしていたカリキュラムだったけれど、次の学年に引き継げるのかどうかと、逆に、先輩から話を聞いていて来年になったら自分たちもそれと同じことができるとワクワクしていたら、自分たちの学年にはなかったとかいうようなこともよくあると思うのです。それを学校のものとしていくことが大切で、ある先生だけのマンパワーではなくて、学校としての財産になっているのが大切だと思います。我々の局は来年は間違いなくなりますが、学校の先生方をバックアップしていくやり方というのは何かないのかなと考えています。それがひょっとしたら多摩市でされているE S Dコーディネーターの役目なのかなと考えています。E S Dコーディネーターというのは、学校の文化も分かりながら、学校外の風を吹かせるような、そんな人でないといけないのかなと思います。教育相談員とかALTなどもそうなのですが、専門の人が来ると、先生はその方に任せきりになってしまうところがあるので、そうではなく、学校の先生の忙しさをフォローしながら、でもその先生がコーディネーターになって活動を実施していくような、ファシリテーターになっていけるようなバックアップの仕方はないのかなというように、せっかくE S Dの世界会議推進局で仕事をさせていただいたところで何かお役に立てないかなというのが、自分自身の課題です。

岡山市としては、地域との連携を重視してE S Dを進めてきていますが、地域だけで井の中の蛙にならないように、もっと広い大海の中に子どもが堂々と出ていってプレゼンテーションできるような、何かそういうことができないかなという考えもあります。

○赤松康子（岡山学芸館高等学校・清秀中学校）

こんにちは。岡山学芸館高校・清秀中学校の赤松康子と申します。

私は、実際にE S Dに関わっている担当者ではありませんが、一応学校の中のメンバーにはなっております。実は、本校の英語科は1年間留学のコースがあるのですが、2005年に岡山市で持続可能な教育の立ち上げの時に、その英語科の生徒が発表をさせていただきました。それから10年たったのですが、私の中でのE S Dというのは、やはり人間教育主体プラス自然と人間との関わりだと思っておりました。よく自然との共生などと言いますが、私の中では自然が先で、その中で生かされている自分が自然を大事にしながら学んでいく、だから環境問題とかはきちんと考えていけないといけないのではないかなという考えがあるのです。でも、環境だけがE S Dではないと私は思っています。

皆さんとはちょっと関わり方が違うと思うのですが、一応英語教員として、私たちの学校には大変たくさん留学生が出入りします。1年間ずっといる人もいますし、年間通して何十人もの人

が、モロッコからだとかオーストラリアだとか、色々な国からやってきます。今、中学校で教えているのですけれども、中学校の授業の中で、たまたまコミュニケーションという授業もいただいていますので、その時間を使って、短期留学生などに授業に入らせていただくのです。そうするとお互いの文化の違いだとか、色々な意味で自分と違う、色々な国のバックグラウンド、カルチャーを持っているということがよく分かりますし、本当に英語しかできないような人が1日来ると、意思が伝わらなかったとかということがあるので、生徒はそれなりに何かを会得していることがあるのです。この活動をずっと続けているのですが、今日、色々な皆さんの発表をお聞きして、自分の中で振り返りが無いことに気づきました。交流活動の下準備はするのですけれども、実際に交流する時にはほとんど私は口に出しません。子どもたちにコミュニケーションのグループをつくって任せる状態で見守っているだけで、どうしても困っているところに入っていきというような授業をやりません。先ほど、中島先生がおっしゃったように、カリキュラムとしての継続性がないのかもしれませんが、今年の生徒にはこの活動はあったけれども、次の時にはないのかもしれませんが、私がいるからすることであり、他の先生だとしらないという心配があるので、それは学校としての問題だと思います。でも、何の教科でもよいのですが、やはりやりたいという意味がなければ、アイデアが湧いてこないと思うので、その辺の進め方が難しいなと思います。

それから、学校間のESDの取り組みですが、高校生はユネスコスクールに登録されていて、今年度の秋の色々なイベントにも役割をいただいていますので、何度も大阪に行きましたし、岡山での集まりの時にも、生徒たちが一生懸命やっています。担当の先生は本当に忙しい。授業をしなければいけない、学校の色々な用事もある上に、土日に出ることが多いので、本当に多忙です。だから、本当にその多忙の中でやるというので、やりたくてもやれないことがあるし、子どもにフィードバックしてあげられないこともたくさんあると思うのです。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。

○井上千鶴（奈良市立興東中学校）

奈良市の興東中学校から参りました井上と申します。学校はかなり山の中にある小規模校で全校生徒が今は23人というような学校なのですが、よろしくお願ひします。

本校は、今申し上げましたように非常に小規模な学校です。ですから、ESDにかかわるプログラムなど、皆さんにこういうことをしましようという提案をしたら、当然のことながら、全校で取り組

まなくてはできないというようなどころがあります。昨年は人数も30数人いたのですが、全校での取り組みというかたちで、アメリカの学校との交流もいたしました。中学生なので、英語中心で、日本語を英語に訳すといった作業等で苦勞も随分多かったです。そんなこともありましたが、生徒たちに非常に力がつきました。英語力ということではなくて、受動的で自信がないといったいわゆる小規模校特有の弱点をかなり克服し、積極的に何でもやってみようという方向に転換できたので非常に成果が上がったなと思っております。ただし、先ほどの先生もおっしゃったように、係はもちろん小規模校ですので私1人です。私がこういうことをしましようという提案がなければゼロになってしまうところが課題としてあります。だから、私が転勤してしまったら活動はなくなってしまいかもしれません。活動を生徒に広げるのは簡単なのです。でも、教師にそれを広げていくというところが課題だろうと思っています。

それから、交流に関する課題は、やはり単発化してしまい、計画するのが非常に難しいというところであろうかと思われます。ただもう一つ、私が思っているのは、あまり難しいことをやろうとか、難しく考え過ぎるとなかなか腰が上がらないなということです。もっと簡単に考えたらいいいと思います。日本人だったら、結構きちんとプログラムを立ててと考えるのだけれども、何かもっとフランクにできると思います。私の知っているアメリカやオーストラリアの先生もっと何かフランクにやっているように思います。うちの学校へも2年前にアメリカの先生が10人ぐらい来校されたことがあったのです。その時も、私に来てもらいましょうよと校長先生に提案いたしまして、教員のほうが随分と二の足を踏んだのですけれども、そんなに難しく考えず、一緒に授業に入ってもらいましょう、体験してもらいましょうということで、半日で給食まで食べてもらったのですが、随分とその時は喜んでもらいました。だから、余り構えないでやりましょうと、失敗があってもかまわないからどんどんやれることはやってみようというかたちで進んでいって、別に失敗があってもそれなりに得られるところがあるのではないかなと思っています。

○志賀千里（岡山市立京山中学校）

岡山市立京山中学校から来ました、京山中2年目で、採用も2年目の志賀といたします。よろしくお願いたします。2年目ということもあって、昨年度、ESDという言葉を実は初めて聞いたので、いまだに研修などがあっても、難しいなというのが本当の感想です。課題としては、私が曖昧だからかもしれないのですが、何か学校で取り組みがあっても、何のためにやっているのか、どんな生徒を育てたいのか、どんな力をつけさせたいのかなどが教員の間でも統一されてないかなと思うことがあります。本校は1学年8クラスあって、学年が違くと、他学年で何をしているのか気づかない間に行事が

終わっていることもあったりして、その辺の意思統一がもっとできたらいいのかなと思っています。本校では多摩市とテレビ会議もさせていただいているのですが、夏休みの間の出来事なので、そんなことが行われていたということを知らない生徒もたくさんいます。教員の間でも、そのようなことがあったのかぐらいに思われている方もたくさんいる感じです。

学校間交流については、継続的な交流がなかなか難しいなと思っています。同じ中学校区の小学校の先生などと、夏休みに研修などでE S Dのことでお話とかもさせていただいたのですが、その研修では話すのですが、次の研修まで間が空いてしまって、何かつながっている感じがしていないなと思っています。自分がまずは勉強して、何かつなげていきたいなと思っています。よろしくお願ひします。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

今、一通り自己紹介していただきまして、それぞれの先生の思いや課題を出していただきました。E S Dを学校全体で取り組んでいくことの難しさとか、教員間での意思疎通をして意識を統一していくというようなことがなかなか難しいというようなお話があったかと思うのですが、時間も限られていますので、その課題はすごく重要なことです。それについて議論しておかないと学校間交流を含めたE S Dの議論が成り立たないことは重々承知なのですが、その話も折に触れながら、今日のテーマの学校間交流になるべく焦点を当てて進めていきたいと思います。

実践発表の部で、鈴木先生が多摩市での非常に熱心に取り組まれている様子や、さまざまな課題もあげていただきましたし、意味のある学校間ネットワークにするためにはどのようなことが大事なのかというようなこともお話しいただきました。せっかくの機会ですので、鈴木先生に特にこの点についてもう少しお聞きしたいというようなことがあれば少しご質問いただいて、それをきっかけに、今の話題とつなげながら話を深めていければなと思いますので、先生方から鈴木先生に、是非この点をお聞きしたいということがあれば、お出しただければと思うのですが、いかがでしょうか。

○永守志帆（岡山市立上南中学校）

ありがとうございます。今日のお話の中で、日常の取り組みとしてのE S Dの一番上にクリティカル・シンキングの実践というのがありますが、日常生活の中で取り組んでいる、朝読書などで取り組んでいるという批評的な思考の例としてはどういうものがあるのかと思ひまして、質問させていただきました。

○鈴木 萌（多摩市立多摩永山中学校）

ありがとうございます。今、授業以外のところでしていることというのが、最近始めたのですけれども、聞き取る力の育成があります。これは、聞き取ったことを自分の言葉でキーワード化できる力を育てるために、学年集会ですとか朝礼の後に、キーワードを3つ書こうとか5つ書こうという取り組みです。それからこれは1年生でしているのですけれども、家庭学習ノートみたいなものをつくらせて、必ず1日1ページ、自分で勉強してきたことを提出するのですが、いいノートのつくり方をしている生徒のものを学年の掲示板上に出したりして、お互い学び合う取り組みを実践しています。3年生で、私がしている「時事ノート」の延長線上の活動でもあるのですけれども、2学期から朝学習でやる予定のものなのですが、新聞記事に対しての自分の意見を書いて、それをシャッフルして次の日に配るのです。そうすると、違う生徒のものが違うところに行く。それで、偶然来た人のものに対してコメントを書く。それを2、3回繰り返して、最後にまたその次の日に自分のところに帰ってきたものを見て、こんなコメントをもらっている、自分の考えはまだまだ突っ込みどころがあったのだな、人の意見を読んでいくうちに、こういう見方もあったのだというので、最終的にそれらを経て、自分は与えられた記事に対してどう思うかをまとめるというメタ認知と多面的・多角的な思考を育てるという取り組みを始めようと思っています。あとは、この3要素をとにかくしっかり植えつけていこうというので、黒板の上のところ、授業の中で意識していくこととして、多面的・多角的視点、論理的思考、メタ認知と貼っておき、教える側も生徒側も日々意識していくという取り組みをしています。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。今お話しいただいたのは、クリティカル・シンキングの実践ということで、先生だけがされているわけではなくて全校で取り組まれているという話ですね。

○鈴木 萌（多摩市立多摩永山中学校）

はい、そうです。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

これは、ご報告の中では、校内研究として進めているというお話でしたけれど、ESDと結びつけようというところはもともと意図しておられたのですか。

○鈴木 萌（多摩市立多摩永山中学校）

そうです。E S Dには色々な要素があるかと思うのですが、その中でクリティカル・シンキングをピックアップしてきたという感じです。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

今年度はクリティカル・シンキングということなのか、それとも永山中学校はクリティカル・シンキングをずっと継続的にやっという点はどうなっていますか。

○鈴木 萌（多摩市立多摩永山中学校）

もともとずっと校内研究の主題はE S D関連だったのですけれども、昨年度と今年度はクリティカル・シンキングに特化してやっという事です。研究奨励校になっているということもあって来年の2月にその研究成果を発表することになりました。このように、昨年と今年度はクリティカル・シンキングに特化していますけれども、ずっとE S Dの中の何かの要素に注目した研究には取り組んでいます。

○赤松康子（岡山学芸館高等学校・清秀中学校）

今のクリティカル・シンキングのことなのですけれども、先生の授業ではなくて、学校全体で取り組むということは、全教科でそういうことをされているのですか。

○鈴木 萌（多摩市立多摩永山中学校）

そうです。全教科です。夏休み中の私たちの課題としてクリティカル・シンキングカレンダーというのを作ってまして、各教科のどの単元のところでこの3要素が出るかをまとめているところです。国語科などは、常にこの要素が出ると思うのですが、例えば、保健体育や音楽などであるとやりにくいところもあると思うのです。ですが、この単元だったらこういうことを育てられるというのを、単元別にカレンダーみたいに表にしていくことをやっています。あとは、指導計画も昨年度から作ってまして、2年間の中で何回か、各教員がクリティカル・シンキングを特に意識して取り入れた授業づくりも行っています。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

何か他に質問はございませんか。

○井上千鶴（奈良市立興東中学校）

ご発表をお聞きして、学校間交流における目的意識を明確化することが非常に重要なんだというふうに思うのです。うちの学校は小規模校なので、先ほども申し上げましたように、自尊心を高める、自信をつけさせるという目的を取り入れました。もちろん米国との交流であれば、英語力を上げるとか、パソコンを使うのならばICTの活用能力を上げるなどの効果もありますが、本校では自尊心を高めるという目的の色々な取り組みの中の一つとして学校間交流というものも取り入れたのです。鈴木先生の学校だけではなくて、他の学校の方にも、どういう力をつけるために学校間交流というのを取り入れていらっしゃるのかをお尋ねしてみたいと思います。お願いします。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

それでは、永山中学校と交流している京山中学校から、先生のご認識でかまわないので今のご質問に関して何かお気づきの点や情報などをお持ちでしたらご紹介ください。

○志賀千里（岡山市立京山中学校）

実は、この後、この「子どもみらい会議」を受けて、2学期以降どんなことが行われるのだろうか、ちょっと気になっているのです。ここで終わらせるのはもったいないと思うのです。先ほどお話ししたように、夏休みの間に何人かの生徒がそういうことをしているというのを知らない生徒もいるので、そこをうまくつなげていきたいのですが、あまり知識もないので、どんなつなげ方があるのか、逆にお聞きしたいところです。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

赤松先生が留学生を交えた国際交流活動を指導されるようなときの、目的意識はどのようなものでしょうか。

○赤松康子（岡山学芸館高等学校・清秀中学校）

うちは中学生で週6時間英語の時間があるのですけれども、4時間はオーストラリアのネイティブの先生が文法を英語で教えられるのです。残りの2時間を英語Bというのですが、英語でコミュニケーションすることにしており、その2時間が私の担当なのです。普通の学校だと反対だと思うのです。日本人が文法を教えて、外国の先生がコミュニケーション担当ということが多いのではないかと

と思います。うちは全く反対になっています。実は私は学芸館高校の英語科を23年前に立ち上げたメンバーなのですけれども、高校1年生の終わりに1年間の留学をオーストラリアかカナダで実施するのです。私はその担当もずっとしてきていましたから、外国の人と関わるのは別に問題ではなく、楽しみなほうなのです。本校に中学校ができて今5年目ですが、中学校は進学校として立ち上げたので、高校に留学生が来てホームステイをお願いしますといっても誰も希望者が最初はなかったそうです。私は4年前から中学校に異動したのですけれども、こうした活動は、楽しみがあるよ、やってみないというちょっとした言葉かけで、すぐ皆やってみようかなという気にさせられるではないですか。やってみてくださいではなくて、何か少し視点を変えると、やってみたいということになって、今はもう中学校でもホストファミリー募集では全然困らなくなっているのです。授業の中でも、私が入るまでは、受験校としてコミュニケーション活動は一切していませんでした。でも、私は本当にもったいないと思っていたので、授業で入れたいと言ったら、自分の授業とするのならどうぞということでした。今もロシアの生徒が来ていて、1年生のクラスに入って国語も数学も社会も全部受けています。そういう子がいても、先生たちがなれてきたので、どの先生も特に積極的にコミュニケーションはされてはいますが、いても大丈夫という雰囲気にはなりました。

私がなぜ海外の人たちとの交流活動をしたかということ、もともと英語科を立ち上げた時から、日本人の子はとても自信がないことに問題意識をもっていったのです。特に英語の時間では生徒はとても小さい声で英語を話しています。英語の時間で声が小さいので、海外に行っても伝わらないのです。だから、ALTの先生がいらしても、多分日本人の生徒が言っていることは分かっていないので、結局歌になったりゲームになったりということになるのです。でも、もっと大きな声じゃないと伝わらないですよということを生徒に教えて、言葉は間違っても、自分が伝えたいと思うことは伝えてみようと思わせたかったのです。要するに外国の生徒に比べると、日本人の生徒は自己肯定感がとても低いのです。私は自分が大好きという子より、自分は「できない」「だめ」などという子のほうが多いのです。そういう意識は取り除いてあげたいなと思ったのです。それができると、自信を持っていろいろなことに取り組んで、楽しくなる。言いたいことが伝わったというところから、自己肯定感は上がってくると思うのです。すると前向きになってくるのです。

それから、どの教科でも私はできると思うのですが、教科を通して世界を知ると、今自分が何をしているのか、何を学んでいるのかというのがすごく分かってくるような気がします。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございます。鈴木先生の資料の中にも、伝えたい思いを持たせるというところ、あるい

は目的やテーマを明確にするというような学校間ネットワークのよりよい方向性に向けてのご提案がありましたけれども、今出てきたお話等を含めて、鈴木先生の思いなど、何かあれば少しお話したいきたいと思います。

○鈴木 萌（多摩市立多摩永山中学校）

今回の学校間交流事例では、正直申し上げると最初に「平和」というテーマをいただきました。今まで色々と国際平和のことを考えたり、道徳でも国際理解の学習をしたり、社会の授業でもこれをして、すごくよいものを全てもっていて書いているのだから、それを発信しに行きなよということで、私と生徒たちはそれが最初の目的だったのです。ただ蓋を開けてみてやってみると、それだけではなくて、結局発信してもそれだけで終わってしまうことがわかりました。平和というのがあまりにも漠然としていたのです。うちの学校のやり方で、こういうことを学んできましたよという平和と、京山中学校で出してきた平和に向けてこういうことをやってきましたよというのとでは、全然方向性が違っていました。両校が今までやってきたことを発信して、改めて学校を超えて平和について話し合おうという目的だったのですけれども、だんだん違ってきてしまいました。ですから、テーマを明確にすると書いたのはそれもあつてのことです。テーマを平和としたからといって明確になっているかという、そうでもなくて、そのテーマをどう定義するかということもやはり出てくると感じております。

○赤松康子（岡山学芸館高等学校・清秀中学校）

先生が「平和」というテーマで社会科の授業をされた時に、国語の先生も「平和」に関する授業を同時に共通でされたのですか。英語などではどうでしたか。

○鈴木 萌（多摩市立多摩永山中学校）

国語科とは多少交流をしていたのですが、英語科とはそんなにしませんでした。最初は英語でもスピーチしようという話だったのですが。

○赤松康子（岡山学芸館高等学校・清秀中学校）

社会科などでプレゼンなどはされますか。

○鈴木 萌（多摩市立多摩永山中学校）

はい、します。ただ「平和」についてプレゼンを用いた授業をしたことはなかったです。

○赤松康子（岡山学芸館高等学校・清秀中学校）

私の経験からいいますと、プレゼンはいろいろな意味で、上手下手関係なくものすごく役に立つと思うのです。私は、この夏休みの宿題は、日本の有名な人、亡くなった人、有名な人を一人選んで、コラージュとって、四つ切りぐらいのものに、その人の写真など色々なものをべたべた貼って、それを持って発表することになっています。外国などで低学年でやるのですが、そこには日本語や英語もなく、写真だけでもいいのです。色とかその人を表すようなもので埋め尽くして、それをイーゼルに立てて、みんなの前に立ちプレゼンさせるのです。最初、すごく嫌がりますがけれども、やり終えた後はすごい達成感が出るし、是非実行してもらえたらいいと思います。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

学校間ネットワークを生かした学びを深めていくためには、多様な方向性があると思うのですが、鈴木先生は、目的意識を明確にして、それを継続的にやっていくというような方向性を示されました。それから、もう一つ、井上先生がご提案された気軽な交流もありなのではないのかというような話が出ました。もちろん各場面に応じてだとは思いますが、やはりESDというところでまとめ上げていく、あるいはユネスコスクールの活動としてまとめ上げていく時には、どうしても持続可能な社会づくりの構成概念と言われるようなものとか、あるいはESDの視点に立った学習指導で重視する能力、態度の育成として意味づける、これは後づけでも構わないのですが、いずれかの時点で活動をきちんと意味づけて説明するというようなことは、一つ大事なことになるのではないかなと思うのです。もちろんコミュニケーション能力をつけることができます。それから、自尊感情をつけることができますというようなことも、このESDの視点に立った能力や態度のベースに意味づけることができるので、これまでなされていた英語科の活動や社会科の活動等を、そのまま少し発展的にしていく中でも、これはESDの活動とかユネスコスクールの活動だとかというふうに示すことができると思います。それを示していくことによって、先生方の意識も少し変わってくるであろうし、そういうようなことを意識した段階で温度差があるというふうに感じて、場合によってはそれを何とか解消しなくてはいけないとか、難しいなと思いつつ実践していくというようなことになろうかと思うのです。一方、学校間ネットワークを使った活動となると、やはり大きな問題としては、環境整備の問題、それからスケジューリングの問題だとか、お金の問題だとかということがあります。これはかなり高いハードルで、学校間交流を阻害している大きな要因になっているということでした。これを何とか解消できるようなアイデアがあるのかというようなことに関して、先生方のご感想をお聞きしたいのですが、何かありますか。

永守先生、特に中学校間の交流ではないのですが、小・中学校でも何か連携しようというような時に、スケジュールリングの話がすぐ出てくると思うのですけれども、それがうまく解消できそうなアイデアなどはありますか。

○永守志帆（岡山市立上南中学校）

やはりスケジュールリングの問題などでちょっと難しいことがあり、E S Dの事業計画を提出した時に、担当者にちょっと相談をしたのです。その時に、学校で防災のこと等について2年生で調べて、それをパネルにしたり展示したりするのであれば、同じような調べ学習をしている隣の中学校とそれを交換してはどうかというご意見をいただいたのです。生徒を動かして連れていくとなると、計画から大変なので、まずは気軽に模造紙で作ったものだけを交換するぐらいだったらいつでもできるから、そういうところから始めたらどうかというご意見をいただいて、ああそのとおりだなと思いました。それから、さらにその上をという感じでステップを踏んでいくという方法もよいかと思っています。うちの学校の今の状況からすると、突然外国の留学生を招いて活動を行うというのはハードルが大変高くて、どうも飛び越えられそうにないので、今年はそういうスモールステップでいきたいなと思っています。文化祭が9月にあるので、その文化祭で使ったものなどを交換できたらよいと考えています。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

直接交流というより気軽な交流の仕方にアイデアがあるのではないかという話でしたが、先生方がご存じの方法で、少しハードルの低い交流事例があれば、何かお聞きできればと思います。多摩市や奈良市など、他の学校でも構わないのですけれど、このような交流をしているみたいだということがあれば、お聞かせください。今は物を、成果物を交換しましょうみたいなことですか。例えば、壁新聞を作りましたと。その壁新聞を、自分の学校で貼った後、次の学校に送って、うちの学校でこんなことをしていますというのをちょっと貼ってもらえませんかというような交流もありそうですね。それはもしかしたら小学校段階から始められるかもしれません。あるいは何かレポートを作ったら、生徒たちが見た後、他の学校に送って、それを見てもらって、コメントを返してもらうような交流もできるかもしれません。それならスケジュールリングも少し緩やかなスケジュールリングで実現できるかもしれないというアイデアかと思うのですけれども、その他に何かございますか。

○中島陽子（岡山市ESD世界会議推進局）

取り組みを見せ合うショーケースがあるといいですね。今、岡山駅南地下通路にある「ESDの散歩道」のようなかたちで、今年作品みたいものが、何か展示できるようなショーケースがあつて、そこに行けば、お互いに見られるというものがあると面白いかもしれません。先ほどの自己肯定感のお話にもつながるのですが、立派なものできているのだけれども、「いやいや、こんなものは出せません」といつて隠し持っているんです。隠しているつもりはないのですが、それを他のお隣の学校の人が見たら、「ああ、これはうちがしたのと一緒だけど、ここが違うね」とか比較などもできたりするのでよいと思います。実践事例集など立派な冊子は綴じ物になっているから、ああできたと綴じて終わってしまうのですが、そうではなくて、生徒の作品などお互いに学習成果の実物を見せ合えるような場があるといいですね。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

そのような交流の方法もあるということですね。これも、スケジューリングを少し緩やかにするよ
うなやり方になるだろうということですね。その他に、何かありますか。

○井上千鶴（奈良市立興東中学校）

私の学校は小さいので、例えば学年で何か活動をした時は、まとめたものを他学年の子に発表する
という形式を常にとっているのです。昨年は交流をするために1年から3年まで含めた小グループに
分かれて、例えば華道や柔道、琴といった日本の文化について、パソコンを使ってムービーメーカー
でまとめるという作業をしました。そこには説明も出てくるのですが、それをホームページにアップ
しました。そうすると、その画面を見れば、その学校がどういう活動をしているのかというのは非常
にアピールしやすいと思っています。

ESDとは直接には関係ないですが、今年は3年生は沖縄へ修学旅行に行き、それを他学年
の子に報告しました。また、その報告をやはり同じようにもう一回まとめるという作業をして、やは
りホームページにアップしました。そうすると、保護者の方や地域の方にそれを見ていただいたら、
どんな修学旅行をしたのかということは簡単にわかっていただけます。子どもがまとめたものをアッ
プするというかたちだったら、非常に簡単で、ホームページを1つつくれば、他の学校と、例えば修
学旅行はどんなことをしているのかとか、キャリア教育ではどんな勉強をしているというのが伝えや
すく、交流していくのがやさしいかなということで手段として提案します。

○司会 川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

学びの成果を発信していくことが交流のきっかけになりますし、それが子どものつくったようなものだったら、あまり苦勞なくできるのではないかというような話だったかと思います。

学校間ネットワークで交流すると、やはりその場面ではそれなりの成果はあるし、それから課題も出てくると思います。その課題を解決してよりよい交流をしていこうというふうには思われるのですが、そこには色々なハードルがあって、なかなか難しい現状もあるということだったかと思うのです。ユネスコスクールは特にそうなのですけれども、交流活動の中から得られるよさというのをしっかり認識して、それを広めていくというような役割を持っている学校のプロジェクトだと思うのです。ただ課題も大変多く、特に中学校では難しい現実があるようです。私が見ている感じで、小学校はそれなりにできていたりします。また、高等学校も英語のコミュニケーション能力も少し高まっていて少しやりやすい。中学校が抱える教育課題がすごく大きいというようなことも含めて、中学校がかなり難しいというような現状で、ネットワークを生かしたよりよい活動がしにくい状況があるかと思うのですけれども、今日の永山中学校のような例だとか、あるいはその他の小学校の取り組み、あるいは高等学校の取り組みでも、中学校が活用できるようなアイデアが含まれていたのではないかと思います。また、先生方を動機づける方法だとか、E S Dや交流活動を持続可能にしていく難しさを乗り越える方法も先生方の交流の中から得られてくる知識なのではないかなと思います。

結論的にこういう方法がいいとか、こういうふうな取り組みが私たちはできますというようなところまで、今日はお話が到達しませんでしたけれども、是非今日お会いした先生方のコミュニケーションネットワークを持続していただいて、各学校でのよりよい取り組みにつなげていかれることを期待しています。

それでは、これで第2分科会を閉じさせていただきたいと思います。ご協力ありがとうございました。



(第3分科会)「高等学校における学校間交流を含んだESDのカリキュラム作り」

○司会 柴川弘子(岡山大学大学院教育学研究科)

時間がまいりましたので、高校分科会を始めさせていただきます。本日分科会のファシリテーターをします岡山大学ESD協働推進室でコーディネーターをしております柴川弘子と申します。よろしくお祈いします。この高校分科会には、先ほどご発表いただきました筑波大学附属坂戸高校の今野良祐先生をお迎えし、人数も少ないことですのでざっくばらんに色々な話や情報交換をしながらよいまとめができればと思っています。

今回は「高等学校における学校間交流を含んだESDのカリキュラム作り」というタイトルをつけさせていただきました。ここにお集まりの先生方は、ご自身の学校でESDを実践され始めたばかりという方から、もう長年されていて、そろそろマンネリ化の危機を迎えているなど、様々な状況があると思うのですが、特に学校間交流、カリキュラムデザインという2つの点が要素になると思います。

なぜ今ここで、学校間交流とカリキュラム作りに力点を置くのでしょうか。先ほども複数の先生方からご発表でそういったことをお話しされていたと思うのですが、やはりESDというのは、自分の暮らす地域だけでなく、世界の持続可能性の課題についてそれを我がこととして捉えて、協働で解決するための学びであるため、学校間交流はそのためにも不可欠な要素であると考えられるということです。それから、カリキュラム作りに関しては、ESDというのは一過性のものでなくて継続的で、そしてさらにはイベントではなく、日常的な学びであるということからも、その中でそういった学びをずっと継続していくためにも普段のカリキュラムの中にどのようにESDを練り込んでいくのか、ESDの要素のしっかり詰まったものとはどういったカリキュラムなのかというところを考えていかなければ、ESDの学びというのはなかなか持続しないのではないかと考えられるのです。ですから、今回は学校間交流、それからカリキュラムデザインという2つの点を含んだトピックで行いたいと思っています。

今日の進行ですが、まず先生方に自己紹介をお願いします。その中で次の点を含んでいただきたいのです。今のそれぞれの現場でのESDの実践の様子について、学校間交流をしている・していない、色々あると思うのですけれども、どのようにされているのか、それからもし学校間交流もカリキュラムもまだまだというところだったり、何か困難を感じられているようなことがあったりするのであれば、どういった困難や課題が待ち受けているのか、それからカリキュラム作りについてどのくらいまで進んでいるのか、先ほどと同じで、もし進んでいないのだとすれば、どういった課題が今、先生方の前に立ちはだかっているのかということを出していただきたいと思っています。

もう一つは、先ほどの今野先生のご発表に対して、ご質問や感想などをお含みいただけるとありがたいです。

ディスカッションの時間をたっぷりとりますので、要点を整理していただいでできる限り手短にお話しいただけるとうれしいです。

○小寺裕之（清心女子高等学校）

岡山県のノートルダム清心学園の清心女子高校の小寺といいます。お世話になっています。学校のほうは岡山県のユネスコスクールに2012年に加盟させていただきました。今年度は「ユネスコスクール世界大会高校生フォーラム」を他の学校と一緒に取り組ませていただいています。もともと生命科学コースというところがSSH(スーパーサイエンスハイスクール)に指定されて9年目になるのですが、そこから環境問題、あるいは希少動物、動植物等の研究というところからユネスコスクールへ加盟させていただきます。しかし、学校はカトリック系のミッションスクールですので、これまでも国際理解教育、人権教育、平和教育、特に女性の自立ということで様々な取り組みを行っていたのですが、それらをESDという言葉と関連づけることが全くございませんでした。昨年この研修会に参加させていただきまして、ESDカレンダーという取り組みを知り、これはすばらしいということで、早速家に帰って枠だけを作ったのですが、そのまま1年間が過ぎてしまいました。日常的な活動としての学校教育をESDと関連づけながらESDカレンダーにまとめるというのが最初の私の課題だと思っております。その後、今岡山で行われる「高校生フォーラム」が終わったら何をするのかと様々な教員に言われ続け、イベント的なものがやはり必要なのではないかと考えておりますので、そういう意味で、今日のご講演は私も大変参考になるところがあり、ありがたいと思っております。よろしくお願ひします。

○鎌田理加（岡山県立岡山一宮高等学校）

岡山一宮高校からまいりました鎌田と申します。本校がユネスコスクールの指定を受けたのは2010年のことなのですが、それはSSH(スーパーサイエンスハイスクール)校ということで、主に環境教育、国際理解活動といったようなことを、SSHを中心にしていました。この関係で、そこからそれをESDの視点から捉えてみてはどうかということで、岡山大学の先生からお話をいただきまして、ユネスコスクールに加盟させていただいたという経緯があります。

現在、学校間交流として取り組んでいる点は主に2点です。先ほど小寺先生が言われたASPnetの「高校生フォーラム」の運営スタッフとして全校生徒に呼びかけて、大阪の高校生や他校の高校生と一緒に

に協働しながら運営のためのスキルとハートを磨いています。もう一点は、今日、吉野小学校の先生が紹介されていた「アートマイルプロジェクト」という活動に本校も参加させていただいております。昨年度はマレーシアのモントフォートユースセンターの高校とスカイプを通じて交流しながら、協働で1枚の壁画を完成させました。日本側で壁画の半分を描き、残りをマレーシアに送って完成させてもらい、またそれを日本に送り返してもらうという活動です。実際に物が海を越えて行き来するというようなところが生徒にとっては、海外とつながっているという実感を得られたようで、充実した経験につながっているのではないかと思います。

カリキュラム面での課題ですが、E S Dを意識した正式なカリキュラムというものは本校にはありません。昨年度よりユネスコ係というのが校内の分掌としてできまして、まだまだ小規模ですが、徐々にカリキュラム、それから校内活動を推進していけたらということを実感しています。今日ご講演いただきました今野先生の取り組みは、様々なことをされていて、勉強したいなというところがたくさんありました。ありがとうございました。

○榎野滋子（岡山県立倉敷商業高等学校）

失礼します。倉敷商業高校から参りました榎野と申します。今日はユネスコスクールの先生方がここにお越しだと思うのですが、本校はユネスコスクールに加盟しておらず、E S Dに本格的に取り組んだのは今年度からです。実は私は国語科の教員で、これまでずっと普通科に所属していました。管理職になってから商業高校に移ってきました。商業高校の教育というものに色々とカルチャーショックを受けて3年目になります。商業のプロパーではない者として、商業高校の教育に活を入れられるものはないかなと考えた時に、E S Dというものに巡り会いました。どうしても高校は教科の壁が高いのですが、E S Dで各教科の壁を乗り越えることができないかな、どの教科もどの教員も世の中をよくするために、そういう生徒を育てているはずなのですから、それがそこまで意識できていない、それをもっと意識することでやっていけないかと考えています。今日は今野先生が「総合学科の学びこそE S D」とおっしゃいましたが、それを聞きながら、なるほどと思いつつ、商業教育もそうであると感じました。「倉商E S Dプラン」と名づけたE S Dの取り組みを始めたところです。今日は本当に先輩の先生方に色々と伺いたいなと思っています。ですから、交流にしてもカリキュラムにしても、本当にまだ全然できていないという状況です。ただ、交流に関しては「ユネスコスクール世界大会」に来られるウガンダの高校生の方々を11月4～5日、本校にお招きしておもてなしというかたちで行う予定です。是非そこを一過性のお祭りにせず、これから継続的な国際理解教育につなげていくための何かヒントを今日はいただきたいと思っています。

それから、カリキュラムに関しては、E S Dに取り組む学習としては、総合的な学習の時間が使われていると思います。本校の場合には商業高校なので1年生で1時間だけ総合があって、あとは3年生の課題研究で代替というかたちになっています。ですから、E S Dに取り組む時間となると、どうしても各教科の授業をE S Dの視点でやっていかなくてはいけないと思っています。私は昨年度もこの研修会に参加させていただいた時に「E S Dカレンダーはすばらしい。これを絶対、倉商版を作ろぞ」と思って帰ったのですが、まだできないままの状態です。そういったあたり、各教科の取り組みの中でE S Dの視点を取り入れたやり方についても、是非教えていただきたいと思っています。よろしく願いいたします。

○長谷川博之（岡山県立倉敷商業高等学校）

失礼します。倉敷商業高校の長谷川と申します。先ほどの本校の槇野校長が言われたように、昨年この研修会に参加させていただきまして、倉敷商業でE S Dという言葉が根づき始めたところところです。本校では就職をする生徒が約半分、地元根づいて、将来地元で暮らす生徒がたくさんいます。その関係で地元の商店街や地元の倉敷美観地区周辺の倉敷川の清掃活動など、地元のために多くの活動をこれまでしてきました。その活動していることが実はE S Dの理念であり、持続的な開発可能な教育という意味でお聞きしたのですけれども、地元の継続的な発展や環境の保護に役立っているということが客観的にE S Dを通してわかるということが大変納得できる部分ということになりまして、世界的にも評価をしていただけるような活動なので、生徒たちにもそういった活動をまず一つずつしていこうということで取り組んでいます。今年は学校間交流や、カリキュラムなどはなかなかできていないのですが、初めて倉敷市立倉敷西小学校へ夏休みに宿題のボランティアで生徒がサポートに行きました。そこで、私は自分たちが誰かのために役に立っているということを実感できるということが生徒にとってとてもすばらしいことなのだと感じました。今日は色々なことを勉強させていただいて、学んで帰りたいと思っています。よろしく願いいたします。

○園田哲郎（岡山県立林野高等学校）

県立林野高等学校の園田と申します。本校は昨年12月にユネスコスクールに認定されたという、まだ新米でございます。本校のカリキュラムは、主に総合的な学習の時間と「マイ・ドリーム・プロジェクト」と呼んでいる活動を中心に行っています。それから、美作市ということなので、今年度より学校設定教科として「みまさか学」でE S Dをさらに深めようという、この2本立てでE S Dのカリキュラムを行い、昨年、今年と国・県の指定も受けています。詳しくは「月刊高校教育」という雑誌

に私の拙い文章が載っておりますので、よろしければご覧ください。

学校間交流は、矢掛高校という県内に先輩の高校があります。その高校は白石島という瀬戸内海の島で、大変優れたE S Dの研修をしまして、そこに寄せていただいて一生懸命取り組んでいます。海外のどこかと交流したいということで、今年から、台湾の修学旅行を開始しまして、学校間交流をしたのですが、将来はもっとE S Dで深められるように考えていきたいと今日発表を聞きにまいりました。

○柿本芳子（岡山市E S D世界会議推進局）

岡山市のE S D世界会議推進局の柿本と申します。今日は、高校教師の津田が都合で来られなくなりまして、かわりに出席させていただきました。先生方には11月のE S D世界大会に向けて本当に色々な面でお世話になっております。今日は先生方が各校でどのように取り組まれているのかというところが具体的に分かりそうなので、大変楽しみにしています。よろしく願いいたします。

○内田賢治（岡山県立和気閑谷高等学校）

和気閑谷高校の内田と申します。今年赴任したばかりなので、E S Dについて学ぶために参加させていただきました。本校のE S Dは、本校にとっては必要不可欠な、学校の存続をかけたような面があります。本校は中山間地域であるため、生徒数の減少や地域も商店街も非常に寂れた状況にあります。また、地域が持続可能でなければ学校も持続可能でありえなくなるという危機感から、閑谷ボランティアに取り組んでいます。本校は閑谷学校を前身とし、340年以上の伝統がある学校ですので、閑谷学校の持続可能というところで、生徒会が主体となって閑谷学校でボランティアガイドをしています。地域の活性化、地域との連携を感じます。問題点としては、活動を立ち上げたばかりですので、見えて、生徒会が主体なのでなかなか全校生徒の輪が広まっていない、一部の生徒だけで頑張り、生徒会も先生だけが企画されて大変そうだなという印象をもっています。学校間交流につきましても、学校との情報交換はあるようですが、定期的な交流はまだ確立されておらず、カリキュラムについてもまだまだ授業をふまえてというものが無いようです。特にカリキュラムについてご意見をお聞きしたいと考えています。よろしく願いいたします。

○田中誠一（大阪教育大学附属高等学校池田校舎）

大阪教育大学附属高校池田校舎の田中と申します。ユネスコスクール、当時はASPnetでしたけれども、2004年1月に承認決定ということで、そこからスタートしました。その後にE S Dが始まったと

ということで、カリキュラム的には当初、その少し前ぐらいから国際理解教育で総合的な学習の時間を使っていくというかたちでしたので、それを再構成し、1年生1単位、2年生2単位で通年ということで、基本的にはそこがE S Dの年間通じてこの時期にはこれをするというのが大体決まって進んでいるという状況です。

また、他教科も当然、教科書の中にどんどん内容が入ってきますので、各教科で教材に合わせて、その時その時に扱っていただいているという状況です。17年になりますので、マンネリと言えばマンネリなのですが、最近の問題については大阪が少し特殊だと思うのですが、国立附属、地域の教育委員会と人事交流ということで、人が代わり、もう当初のメンバーはほとんどいないというような状況になりつつあります。公立ですと、校長先生が「うちはこのことをしているから」ということで引っ張ってこられるのですが、教育委員会のほうは「行ってらっしゃい」ということで来られる方なので、その継続性をいかに維持していくかが非常に大変です。新しく来られた方はE S Dを期待しているのですが、そういうことではないですので、それが今、大変な状況なのです。

学校間交流ですが、もうユネスコスクールに認定された当初から大阪は、国立は本校、公立の北淀高校、それから私立の羽衣学園と文化が違う学校がほぼ同時に認定されていました。3校が同時に色々な活動を行ってきたということで、交流というよりはむしろ一緒にしているというかたちで進んでいます。現在の大阪のユネスコスクールも同様です。ですから「ユネスコスクール世界大会」も共同で開催というのが基本になっています。ただ、逆にいうと今度それぞれやったところを発表するような場がないということに、逆に少しそのあたりが弱くなっています。岡山県の高校と一緒に11月の国際会議に向けて忙しいためです。現在では、海外交流先である韓国と定期的に取り組んでいますけれども、やはり普段会わないところで発表するという会議と普段会うところで報告するのとでは、やはり生徒のモチベーションが違いますので、そのあたりをもう少し大事にしていけないと考えています。

○木地広樹（岡山龍谷高等学校）

岡山龍谷高校の木地と申します。よろしくお願ひいたします。先ほど開会の挨拶の時にもありましたが、2008年には岡山県内にユネスコスクールが高校2校のみであったということですが、そのうちの1校が岡山龍谷高校でございますので、ユネスコスクールの加盟の歴史だけは長いという状況です。活動の主体は、学校設定教科のRLA、「龍谷リベラルアーツ」というものをユネスコスクールに加盟する前から取り組んでいます。その中での活動、様々な分野があるのですが、その中に一緒に入れていくという形で行っております。このRLAという授業は普通科と情報科という2つの学科があり、

大半の生徒は普通科に所属しています。その普通科の生徒が1～3年生まで全て履修させるという状況ですので、一応3年間、そのRLAの授業はやっていきます。ただ、その中にESDだけではなく、進路の部分や、色々な内容が入っているという状況になっています。ただ、情報科の生徒にはその授業がありませんので、教科の中にどういうふうにESDを取り入れていくか、先ほど今野先生のお話にありましたように、授業を色々とされているようなかたちがもっとできたら本当に色々なことができいくのだろうなと思っているところです。長いことRLAの授業は変わらず、大体同じようなことを毎年しているので、それこそマンネリ化してきている部分もありますし、逆に単発イベント的なものはありませんので、ESD世界会議など何かまとめるようなイベントがあればやっていきたいなというふうに考えているところです。なかなか、学校間交流ができていないのも実情です。今年で3年目になります、「ESD世界会議」に向けての準備セミナーにずっと加わらせていただいています。生徒数などで限られている面はありますけれども、今そういう状況になっています。よろしく願いしたいと思います。

○落合輝紀（ナーサリー富田幼稚園）

徳島県徳島市から来ましたナーサリー富田幼稚園の落合といいます。幼稚園なので5歳児などを見ているのですけれども、今野先生の話が大変参考になりましたので、急遽飛び込みで参加させていただきました。

うちは新聞制作のプログラムとしてESDをしています。幼稚園でのESDというのは、ほとんど実践例などもかなり限られているというか、手探り状態なのです。また、うちがしているのも妙に国際理解みたいな感じだったりするので、そんなことをするというふうにまだ現状では見られているのです。今野先生のお話にあった「総合学科がESDそのもの」というのは、幼稚園の子どもたちにはそのまま当てはまるのです。幼稚園児はまだ小さいので、この後部活があり、明日はテストを受けて、ちょっと手抜きをしてみようというような見通しは全然ありません。ですので、今、子どもたちの目の前にある課題を全力で取りかかるというのは、大変集中しやすいですし、活動が深まりやすい年齢だとは思っていますので、イメージしている以上に色々な活動ができると実感しています。

海外交流という点では、ペンパルフレンドであるシアトル（アメリカ合衆国）とで、子ども同士を1対1のペアにして文通をさせるというプログラムを組んで活動していたことがありました。子どもたちを1対1でペアにすることによって、自分の友達はこの子なのだということで主体的に関わりをもつことができるため、これは大変よいことだと思ってやり始めました。しかし、このプログラムをいざ始めると、双方の教育の仕方が違うというのが最大の壁になってしまいました。シアトルの同級

生の5歳児というのは、そこまで語学や文字などの勉強もしておらず、本園の子どもたちが文章をたくさん書いて、好きな食べ物についてのお話をしたのですが、続けるというのが困難な状況になってしまいました。このプログラムを実施することによって勉強になりました。私たちがアメリカに好意的なイメージをもっているほど、アメリカ（海外）が日本に興味をもっていないのではないかというのを強く感じたのと同時に、どのようにしたら交流が深まるのかということをして今日は勉強させてもらいたいと思いました。よろしくお願いします。

○藤原隆範（広島大学附属中・高等学校）

広島大学附属中・高等学校の藤原と申します。私の学校は、ユネスコスクールに加盟した時期は大変早く、昭和28（1953）年のことでした。これは、いわゆるASPnetを最初にユネスコ・パリ本部が決定した時の最初の加盟校、世界32ヶ国のうちのひとつ、日本では6校であったうちの1校でした。これは、もちろん被爆地・広島ということが非常に大きかったというのを聞いております。私は平成2年に本校に赴任しました。最初、部活動の顧問を決める時に虚弱体質だと言いましたら、運動部は無理だと言われ、ユネスコ部が空いているからどうかということで、社会科の教員でしたので、ちょうど渡りに船で、それ以来ユネスコに関わるようになったのです。実はユネスコ協同学校というのは過去のプロジェクトであり、私自身その活動をしているという意識は全くなかったのですが、21世紀になって、文部科学省から「ユネスコ協同学校に加盟していらっしゃいますけど、何かされていますか」とお電話がありまして、「部活動だけはしています」と申し上げたのですが、もう一回ユネスコ協同学校を活性化したいという話がありまして、本校も2004年に今の「ユネスコ推進部」という校務分掌をつくったのです。初期の頃は私が一応部長という扱いだったのですけれども、「あなたばかりあまり長くしてはよくない」と言うので、2010年から私は部を外れまして、部活の顧問をしていたのですが、今回色々校内の事情がありまして、4年ぶりにこういう会議に出させていただきます。正直に言いまして、うちの学校は古く、少し没落した旧家みたいになっていっているの、岡山の新興勢力といいますか、すさまじいパワーを見せつけられて、これはよくないと思いました。筑波大学附属高校も本気になってESDに取り組んでいますし、本校は没落しているということを痛切に感じながら、何とか頑張らなくてはいけないと思っています。1つは、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）というプロジェクトをずっとしているものですから、これは良いようで悪いようで、SSHの中で環境やESDに関係する部分というのは、予算を分けてもらい、SSHの予算の中でドイツなどとESDの国際交流をさせてもらっているのです。しかし、理系のプロジェクトですから、ESDの本体としての活動というのはなかなかできないということがあります。

もう一つは、信じられないかもしれないのですが、広島自体が国公立大学に何人合格させるという大競争時代のようになっています。分かりやすくいうと、いわゆるよい生徒が附属に入学しなくなったということです。逆にいえば、本気になってよい生徒を獲得しにいかうと思った場合、東京大学に何人合格させないといけないという非常に現実的な問題を抱え込んでいるのです。結局、非常に現実的な問題としては、カリキュラムもSSHが大前提であり、英語・数学・国語の学力をつけて、東京大学に通そうということです。ですから、ESDをどうするという点が学校全体の課題として話になっていかないのです。ですから、理系中心のプロジェクトをずっと実施しているということと、附属高校といえども進学実績を出さなければならないという非常に現実的な壁があり、ある一つの段階で少しとまっているような現状です。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。今、先生方から出された課題や現状をお聞きしますと、私も高校の現場で勤めていたので、やはりよく分かるのです。今日参加されている先生方の段階では、ESDをしっかりとしたカリキュラム及び学校間交流という体験的な部分と知の部分との完璧な学び、総合的な学びに作り上げて、その経験から何かというところまではハードルが高いのではないかという印象を持ちましたが、いかがでしょうか。そういう中でも、少しいくつか課題が出ていました。特に多くの先生方は、イベントは必要であるという点です。何らかの国際的な場面、舞台を生徒に与えてあげて、そして学校、他校の生徒と交流するというようなイベント的なものは必要であるということです。そのイベントを乗り越えていくといいますか、イベントとしては一過性のものであることや、イベントをしてよかったなど、今野先生もお話し下さっていたと思いますが、イベントをすることだけが目的であるかのようなやり方ではよくないのではないかということです。では、イベントで終わらせず、継続的な学びとつなげていくためにはどうしたらよいのかということが大きな一つのポイントなのではないかということを感じました。

それから、カリキュラムに関しては、ESDのカレンダーや教科の壁、高校は教科担任制であるため教科間の壁が大きいと思います。それを乗り越えていくために、ESDカレンダーが有用であるか否かということも含めて検討しなければいけないのです。ESDカレンダーは、小学校では大変活用しやすいのですが、中学校、高校になると、大変難しい問題になってきます。その原因の一つとしては、先ほど広島大学附属高校さんからもお話がありましたが、現実的に受験という問題が出てきているために、受験学力をつけなければいけないという場合と、それからナーサリー富田幼稚園さんも一緒だと思いますが、目の前にある課題というものをこなすことや、学校の枠組みがSSH（スーパーサ

イエンスハイスクール)やSGH(スーパーグローバルハイスクール)という枠組みの中でしていく中で、例えば理系的なプロジェクトに終始してしまっていることや国際的なプロジェクトに終始してしまっていて、環境・平和・人権・ジェンダーなど本来ならばESD、幅広い課題を取り扱っていくべきなのに、そこに集中してしまって広がりがないといった現実的な学校の制度としての課題であることがあげられます。

もう一つはこれも結構大きいと思うのですが、人事という課題があります。大阪教育大学附属高等学校の田中先生から出ていると思うのですが、人によってもどうしても変わってしまうということです。特に管理職の配置や担当者が代わってしまうという点で、継続性がなくなってしまう、カリキュラムを上手に作るができなくなってしまうという点が出てきたと思います。課題ばかりで申しわけないのですが、そうした点について、今野先生より、本校ではこのようにして乗り越えているよ、同じような課題をもっているなど何かヒントがあればお話ししたいと思っています。また逆に、岡山をはじめ広島・大阪・徳島よりご参加されている先生方に対して、今野先生からお聞きしたいことがあれば、コメントいただきたいと思っています。

○今野良祐(筑波大学附属坂戸高等学校)

はい。では、改めましてよろしくお願いたします。実はうちのシンポジウムは大阪ASPnetと岡山の今年の秋に開催される「高校生フォーラム」の準備セミナーに一昨年あたりから本校の生徒もスタッフとして参加しています。私自身も一応運営メンバーに入れていただいて学び、実践をしています。それから、広大附属さんの研究企業等も色々と勉強させていただいて、本校は総合科学科として今年で21年目になります。初年度、開設校であるため、ずっと全国から注目を浴びていたという話は聞くのですが、最近の研究大会も参加数が減り、生徒も教員も代わってきて、「非常に苦しく、何とかしたい」と言うので、このESDに目をつけて、何とか総合科学科を盛り返していくために「総合科学科の取り組みをしっかりとやるのがESDになるのだ」というフィロソフィーでしようと思っているのです。まず、そもそもESDというのがなかなか教員に浸透していかないという苦しさがあります。先生方がいかがでしょうか。ESDは、「えっそれどういうこと」という頭文字なのだといわれることもあったりしますが、大阪では「ええやん、それならできそうやん」といわれることもあるそうです。色々な話があるのですが、別にESDは高尚な教育理念でもシステムでもなく、実にシンプルなのです。したがって、抽象度が高すぎるために分かりにくいのです。「これはESDだぞ」と生徒に言っても、生徒はエデュケーションされている側で、なかなか生徒には定着しないところもあるのだと思います。色々な苦しさがある中で今、本校ではSGH(スーパーグローバルハイスクール)

にもなったので、混乱していますね。E S D、SGH、AKB、TPP……、英語3文字のところで混乱しているのです。ただ、ユネスコスクールの担当である私としては、今年の秋以降、おそらく日本人の感じだと、E S Dが消えてしまうような気もしてならないのですけれども、やはり今必要な教育であると思いますので、そこは頑張っていきたいです。本校の場合は、「グローバル人材育成」と「持続可能な社会づくりのための人材育成」に力点を置いています。おそらく、これも親和性の高いもので、それを何とかしていきたいと考えています。先生方のお話の中で、教科の壁という点で悩まれているようですが、総合科学科は比較的合科的な授業であり、コラボレーションなどもあるのですが、そのような中であっても壁は非常に高いです。各教科の先生方が各自の仕事や分掌の仕事で手いっぱいなのです。学年の科目で「産業社会と人間」と「総合的な学習」と、3年生になると「卒業研究」というのがあるのですけれども、教科書がないのです。それを作るのにやはり手いっぱいというところがあります。ですので、他教科が何をしているかというのが分からないという非常に苦しい状況なのです。それを何とかするために私もE S Dカレンダーを作りたいと思い、そのまま同じ枠を作りましたが、特に総合科学科は一人ひとり時間割が違うために、これというカレンダーが作れないのです。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

E S Dカレンダーは先生が1人で作られたのですか。それとも何かワーキンググループをつくって進められたのですか。

○今野良祐（筑波大学附属坂戸高等学校）

作ってもらおうと思って枠を作ったのです。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

枠ですか。

○今野良祐（筑波大学附属坂戸高等学校）

それで終わりました。一人一人時間割が違うもので、非常に難しいというのです。苦し紛れに作りました。配付資料をご覧ください。学校として一応こういうふうになっているよというものです。「教員がまずE S Dをしっかりと理解しないとイケない」という言い方と、「それは理解しなくても先生がしているのもE S Dですよ」という言い方もあります。「では、何も変えなくていいのね」「でも、変えないというのも少し違うな」という意見もあり、本校も実はそういう苦しい状況です。そこに、さ

らに進学実績という圧力もかかり、センター試験などどうでもよいのではないかと私は正直思ったりしています。生徒には、人生のセンター試験に勝てばよいのだと言っています。

先日の新聞には、総合学習などのいわゆる教科外の探求活動のようなものを頑張った生徒は、学力テストでも点数がよいと掲載されていました。ですので、ESDというふうには括らなくとも、課題や問題を自分で見つけ、自ら学び自らそういう活動をしっかりとやっていくことが大切であると考えます。それから今、社会人基礎力や〇〇力というのがたくさんありますけれども、学力はおそらく受験が終わりすぐ剥落してしまいます。それ以外のところを今、我々はしっかりと頑張ることによって学力を生徒が自ら蓄えていくということにつながっていくのではないかと思います。思いながら日々悶々として過ごしているところです。すみません。答えはないのです。一宮高校はユネスコ係、広島大附属高校もユネスコ委員会をつくられていますね。

○藤原隆範（広島大学附属中・高等学校）

生徒会が委員会をつくりました。まず、先生の校務分掌をつくり、生徒会に委員会をつくりました。ただ有効に機能しているかどうかというのは別問題なのですけれども、枠はつくっています。

○今野良祐（筑波大学附属坂戸高等学校）

おそらく、ESDは別に難しいものではないのですけれども、教員も生徒も「あっ、これがESDなのだ」「うちはユネスコスクールなのだ」などという意識の調整はとても大事であると思うのです。別に箔をつけるなどというのではなくて、「そうなんだ」というような意識の調整、そこにユネスコ係やユネスコ委員会という、校務分掌というのは非常に効果的なのかなと思っています。それを何とか校内で盛り上げようというので、ニュースレターなどを頑張って作成しているところなのです。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

ニュースレターといえば、倉敷商業高校でも取り組まれていますね。

○榎野滋子（岡山県立倉敷商業高等学校）

はい。今年が私が担当しているのですが、一応、学力向上委員会というものがあまして、そこを中心としています。来年度以降は、今日のお話も聞きながら“ESD委員会”や“ESD〇〇”というかたちにしていけばよいかなと思っています。それから、今野先生のお話のとおり、私がESDという言葉をもってきたのは、先ほども言いましたけれども、していることはきっとESDなのです。

E S Dというのは世界的な動きですから、今行っていることをE S Dという言葉に落とし込み、皆で意識することで、「自分たちがしていることが世界につながっているんだ」「今、自分たちは世界の皆と力を合わせられる大きなことを今自分たちは学んでいるんだ」ということを生徒に意識させたいですし、意識させる教員になってほしいと思っています。

また、学力、いわゆる受験学力とE S Dというのは、何か相反するような感じがあります。私はこれまでずっと普通科に所属していました。いわゆる岡山県内の進学校というところにおいて、その時には総合学習あるいは国語の教員として、授業をしていましたが、当然、生徒を東京大学に合格させなくてはならないということで、センター何点など、そういう世界にいたのですけれども、授業自体はあまりそのようなことをせずに、生徒にディスカッションやディベートをさせたり、法律裁判劇などをしたりしてきました。それでも生徒は点数をとり、それなりのところに進学しました。それは生徒がよかったからというのものもあるのかもしれませんが、私の中では、E S Dをすることと、受験学力をつけるということは全く矛盾するものではないのです。調査もありましたが、総合学習を一生懸命する生徒のほうが絶対学力がつきますし、しかもそれが本当に生きていく力になっていくのです。そういうことを、ぜひE S Dに取り組む中で検証したいという思いがあります。今は、私は商業高校に所属していますけれども、別の学校に移動しても、学科が変更になったとしても、それを検証したいという気持ちでいます。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

林野高校さんはE S Dという視点を取り入れてもう数年になると思います。私が記憶している限り、E S Dを最初に始めた頃というのはそれこそ、進学校型の学びと、そうでなくて、E S Dのような幅広い学びを中心に、体験的な学びを積極的に取り入れながらいくことと少し拮抗しているような状況が教員の間であったのではないかと思うのです。その後、どのようにE S Dが校内で捉えられているのか、あるいはE S Dの意識づけという点について、生徒や教員の間で何かされているようなことはありますか。「ニュースレター」というのは一つの例だったと思うのです。

○園田哲郎（岡山県立林野高等学校）

色々な方々がいると思うのですが、一つには、本校も昨年度からE S D主任というのを教務課の中につくりました。ユネスコスクールの活動なども積極的に、自主的にやっているということです。やはり、教員側に勉強してもらわなくてはならないと、4月初旬に会議が何日かありました。その中で、1時間だけE S D主任が音頭をとり、外部からE S Dの先生を呼んできたこともありましたが、校内

でE S Dというのは何なのかというのを本校に新しく着任された先生も含めて研修会をしました。すると、最近では全然E S Dに興味なさそうな先生も、「教頭、これはE S Dでしょう」「うちは悪いけどE S Dに関係のない、犯罪心理学の桐生先生という『世界一受けたい授業』で有名な先生を呼んできます」などと言い、「何を言っているのだ」と。「そんなE S Dのど真ん中ではないですか。犯罪心理学というのは。犯罪ばかりが起こるような社会は持続しません。それはもうE S Dだろう」と。「ああそうですか」という感じで、何でもE S Dであるのかというと、そうではないのですけれども、E S Dというのは非常に懐が広いと思います。おっしゃるように、総合学科のテコ入れのためにというのはぴったりなのです。岡山県に真庭高校というのが開校しました。これは、あまりにも過疎化が進んだため普通科・看護科・農業科・家政科が一緒になったというので、私も準備事務局で仕事に携わっていました。その中で、真庭高校はE S Dにぴったりではないかと、保健・衛生・農業・河川、それを普通科の総合学習で補完する、それこそ生き残りをかけてユネスコスクールの申請をしたという、前任校での経験があります。

それから、入試に関してもそうです。田村学文部科学省初等中等教育局教科調査官、村川雅弘先生（鳴門教育大学）は、総合的な学習の時間についてとにかく総合的な学習の時間が日本の教育を変えるのだということで、ずっと取り組まれてきた中で、中学校の実力テストでそれがやっと数値化されたそうです。しかしながら、高校はなかなか難しく、体験探求的なことをしてどのような役に立つのかというのが、推薦入試やAO入試に関しては大変役に立ちます。ただ、学力自体が上がるのかということについては、まだ大きなテーマです。それは一つ一つのテーマを掘り下げていって、そこで数学・地歴・理科の知識などをどんどん使うところまで掘り下げていき、やはりE S Dも教科に戻っていかないといけないのですが、まだまだ本校では表層なのです。浅いです。体験して、発表のみのようなテーマなのです。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

木地先生は長年の「龍谷リベラルアーツ」という取り組みの中には様々なものがあると言われてきたのですが、もう少し詳しくお聞きしたいと思いました。先ほどから高校では、教科の壁を乗り越えるということも難しい課題であるということと、もう一つは、先ほどからしきりに出ている教員間の意識づけです。これもE S Dだと言いながら巻き込んでいくということも大事かと思います。これまでに、RLA（龍谷リベラルアーツ）を知っていただき、何かプロモーション的なことをされてきたのか、今現実として教科の壁というのはどのようにになっているのかについてお聞きしたいと思います。

○木地広樹（岡山龍谷高等学校）

私ども「龍谷リベラルアーツ」というのは、看護、福祉・保育、調理、芸術系の次世代クリエイティブ、スポーツ、その枠にはまらない文理という7つの系列に分けて、それが多少、年によって組み合わせられて福祉と看護が一緒になる年もあるのですけれども、その系列に分けて生徒がそれを選択し、「龍谷リベラルアーツ」の中で活動していくことをしています。

実は、系列数がそれだけ多いですので、担当する教員も必ずしも専門の教員がいるわけではありません。看護や福祉などは専門の教員がうちにはいませんので、それは担当で割り振っています。私は、文理のロボコン担当なのですが、福山大学に行って生徒と一緒にロボットをつくった年もあります。代用の教員ですが、ロボットをつくりました。要は、専門でない教員がそれぞれしていきますので、そこに教科の壁は存在しません。ですが、先ほどの教科の壁というのは、各授業の中でということまでは実際ないのです。RLAの中では、そうしたことはもう関係なく、担当がそれぞれしていくというかたちで動いています。ですから、先ほどから出ているように、ESDという大きい範囲の中では、活動として取り入れていきます。プロモーション活動としては、年度当初は、その話を教員にする、それからRLAをしていく中での、生徒の最初のオリエンテーション的な部分ではお話をしていくという、一般的な形ではあるのですけれども、実施しています。このRLAの授業が3年間ありますが、その視点はこういう視点であるということで、ESDの話などをしていきます。担当する教員も含め、全教職員にESDについての話はしていくというかたちではあるのですけれども、RLAの中では比較的うまく動いているのかなと思います。ですから、そういう中で寺子屋なども実施し、去年はユニクロの服を集めることもしました。そういうことも系列によって取り入れてどんどんしていくというかたちになります。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

大阪では、最初に一緒に様々なタイプの学校がユネスコスクールに加盟したので、いつも一緒にしているという感覚でESDに取り組まれているのではないかという印象をお受けしました。先ほどニュースレターや年度初めの研修会など手法があったと思うのですけれども、田中先生が今お勤めの学校では、特に私たちはユネスコスクールでESDを推進しているのだというようなことで、ESDということに関して何か特別に意識を高めていくとか、取り組まれていることがありますか。

○田中誠一（大阪教育大学附属高等学校池田校舎）

ESDを特別にということはないといえますか、それぞれの方がおっしゃっているように、あらゆ

るところにE S Dがありますので、別にこれがという話ではありません。本校の総合でしている内容でいくと、1年生の最初のうちはやはり、「こういう問題があるよ」「ああいう問題があるよ」ということで話をするのですけれども、それぞれ一応3学年ありますから、教員3等分というか、3分の1の教員が大体1年生を担当して、3分の1の教員は2年生を担当して、あとの3分の1はその間も授業がありますから、3年生ではしっかり授業をしていくという、大体そのような割り振りになります。各教員で特技や得意なところを少し話をするという、最初に教えるという部分はあるのですけれども、基本的には生徒が「このへんが問題じゃない」「このあたりをテーマにして進めていきたいよ」というのを出してきて、それに対して2年生で深めていくというかたちになるのです。そうすると、教員の手持ちに何も無いものがテーマに上がってくる時もありますので、教員も一緒に勉強するという姿勢なのです。総合に関わって生徒と一緒に活動するのが研修だというような感じで進んでいます。ですから、改めてどうのこうのというのはない。どちらかというと、ASPnetとして「ユネスコの理念に従って教育をしていくのはこういった理念である」ということは共通して言うのですけれども、E S Dに関してはあまり研修をするということはありません。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

自然に浸透していくという感じでしょうか。

○田中誠一（大阪教育大学附属高等学校池田校舎）

10年ずっと総合の時間が続いていますので、やらなくてはならないという意識はあります。ですから、もし次に1年生を受け持つ場合、「私はこういうテーマでしてみよう」などというふうに、先生方は思っておられるとは思いますが。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

やはり先生と一緒に学ぶような場面、科を設定しているというのは大きいのでしょうか。

○田中誠一（大阪教育大学附属高等学校池田校舎）

こうだという決まったものはないですし、これが解決したという結論もないですから、一緒に勉強しない限り進まない学問といますか、分野だと思うのです。授業みたいにこれが正解というような形がわかれば、履修という授業が成立するのですけれども、先生方が話をすることについても、それが正しいのかよく分からないのですから、そういう意味では先生も一緒に勉強することになります。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

林野高校さんは、MDP(My Dream Project)もある意味、先生も相当負担に感じるかどうかは個人としてということでしょうか。

○園田哲郎（岡山県立林野高等学校）

MDPは人を呼んでくる、あるいは生徒と一緒にどこかへ行くということがメインとなっているので、そういう点では大変刺激になります。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

教員自身にとっても、そうですね。

○園田哲郎（岡山県立林野高等学校）

それは先ほど言ったように、日本でもトップみたいな人を本校に来て下さいと呼んできて、話を聞くというのは教員にとっても大変なことです。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

それがもしかしたら一つの秘訣なのかもしれないです。継続していくためにも、発展させていくためにも、先生自身が学ぶことや、面白いと思うようなプログラムを考えていくということです。

○園田哲郎（岡山県立林野高等学校）

おっしゃったようにシナリオがないわけで、到達点があるわけでもないプロジェクトをしていることは、誰を呼んでこようか、どこへ行こうか、何を調べようかなど、教員もやはり考えてしまいます。

○落合輝紀（ナーサリ―富田幼稚園）

本園の作っている新聞というのは月刊で出すので、毎月取材に行くのですが、子どもたちが話し合っどどこに取材に行くかを決めるのです。子どもらがそこに行きたいと言った場合、子どもが自分で電話なども全部かけるのです。2週間で、大人は何もしないといいますが、自分で子どもが電話をかけて取材させてくださいというところまで全部させるのです。

○小寺裕之（清心女子高等学校）

いきなり電話をかけるのですか。

○落合輝紀（ナーサリー富田幼稚園）

いきなりかけます。すごく刺激にはなりますので、やはりマンネリにはならないかなと思います。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

相手の方も驚くことでしょう。

○落合輝紀（ナーサリー富田幼稚園）

はい。電話を切られることもあります。「お母さんと換わって下さい」などと言われることもあります。

○小寺裕之（清心女子高等学校）

高校生でもあります。「ちょっと先生に換わって」のようなことが。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

何となく方向性が見えてきたような気もします。学校間交流を含んだE S Dのカリキュラム作りというところだったのですけれども、学校間交流をイベントに終えてしまわないで、そこからの学びを普段のカリキュラムの中につなげていくというハイレベルの課題が設定してあったのですが、その点について、今野先生にもう一度お聞きしたいのです。例えば教員間で、学校間交流は最初に大きな負担、エネルギーがいります。そうしたエネルギーの部分と、それから普通の授業へなかなか結びつけていくことができない時期というのがきつと創成期、もしかしたら今もある又はあったのではないかと察するのですが、そのあたりはどうでしょうか。

○今野良祐（筑波大学附属坂戸高等学校）

とにかく本校は全部手弁当なのです。3兄弟を中心に羽田空港からトランジットでタイと台湾を訪問して説得、交渉します。今はメールやスカイプなど色々ありますが、アジアはお土産の文化がありますので、直接訪問し、それぞれお土産を持っていき、何とか関係をつくっていくという努力はしました。それを継続するという時に、私も7月にフィリピンの附属高校に行きました。メール、スカイ

プだけではなく、ワンポイントです。もちろん国内もそうですけれども、特に海外に関してはそのようにしています。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

その3兄弟以外の先生方というのは、どのように関わっていますか。

○今野良祐（筑波大学附属坂戸高等学校）

基本的には、3兄弟からお願いするようにしています。今、実は長男も大学に転任してしまったので、4男が来ました。このいわゆる国際の委員会からどんどん発注をしていくというのでしょうか、委員会が主導している行事なのですが、下から下から「先生お願いします」とお願いをしに行き、巻き込んでいくというスタイルです。ただ、今年で3年目になりますので、周りの先生方もこういうものだということを知ってくださっていたり、アイデアを逆に提案してもらったり、時間はかかりますが、徐々に進歩はしているのではないかという気がします。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

一宮高校さんもずっと海外の色々なところと交流をされているのですが、いかがでしょうか。

○鎌田理加（岡山県立岡山一宮高等学校）

そうですね。ただ、本校の海外交流はSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の枠でしておりまして、広大附属高校の先生が言われたように、どうしても今は韓国の高校とフィリピンの高校としていますが、サイエンスの課題研究を英語に訳してそれを持っていき、英語でプレゼンテーションをしたりするといった理系色が強いため、なかなかESDにというのが難しい状況です。また、JST（科学技術振興機構）からもそのような文系のことをするなどと怒られたりもするのですが、でも必要だと思ってこそっとするのですけれども、SSHの枠内でESDを意識したカリキュラムや持続的な何かをするというのはちょっと難しいと思います。

いま一つ可能性として、去年から取り組み始めた「アートマイルプロジェクト」があります。ジャパンアートマイルプロジェクトさんが海外の学校とつなげてくださいました。海外の学校とは、スカイプを通じた交流であるため、直接会ってということとはできないのですが、ただそこはESDそのものですので、自分たちの地域が抱えている問題、今年であれば、水問題について考えています。中学校ではお手洗いに「音姫」などを設置していたのに対し、今の高校にはついていないけれども、それ

によってかなり学校で水が浪費されているのではないかと、生徒が言い出したので、周りの身近な水問題について考えてみることになりました。広島で土砂災害などもあったので、防災の視点などを入れたテーマについて考えさせることを、それを今年アメリカの高校がしていたのですけれども、その高校も同じような問題があったということを言われていたので、それをテーマに、お互いに意見交換をしながら一つの具体的なテーマを決めて、絵を描いてというようなことができるかなということを、今ちょっと私の頭の中だけなのですけれども、考えているところです。ですので、学校間交流を含んだESDのカリキュラムとまではいかないのですけれども、ESDの活動の一つとしては、「アートマイル」がよいのではないのかと思っています。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

確かに「アートマイル」は有用であるということを色々なところでお聞きします。絵画を交換するのではなくて、その中にやはりESDの視点が見えますよね。ただ、それが生徒の中から出てくるような、内面から出てくるような疑問点にしておかないと、やはりやりなさいといったかたちに陥ってしまって継続しなくなったりするのかなというのは少し感じるのですけれども、その水問題というのはどこから湧いてきたのでしょうか。

○鎌田理加（岡山県立岡山一宮高等学校）

それはもうどこからか知らないです。うちのユネスコ部の生徒がうちの学区の岡山市立中山中学校には女子トイレには全部「音姫」が設置してあるけれども、うちの学校に来たらそれがない。「先生、これすごい水が無駄になっとなるのではないのかなあ」ということを話していました。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

ユネスコ部の生徒からですか。

○鎌田理加（岡山県立岡山一宮高等学校）

はい。「確かにそうだね」「あったらいいなと私も思うよ」という話をしました。直接、校長先生にお願いをして「音姫」をつけてもらうのは簡単なのですが、そうではなくて、「もし『音姫』があったらどういうよい点があるのか、その現状をきちんと調査してみたらと言ったのです。全校生徒のアンケートをとり、今、集計をして、9月の文化祭に発表できたらよいかなと思っています。その調査をふまえて校長先生のところをお願いに行くよ」と話をしているのです。そういう本当に身近な

暮らしの中でのことについて、女子生徒が言ってきました。男子生徒からはなかったのですが、そういうところからアイデアが浮かんできています。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

ですが、少し広げると教科にもすぐ応用できそうな予感がします。計算というものであったり、文化という部分であったり。それから英語で発表するということから、英語や国語の表現力が磨けるのかなと思うのですが、いかがでしょうか。

○鎌田理加（岡山県立岡山一宮高等学校）

そうですね。専門的には私は英語なので、英語の授業の中でそういうことについてプレゼンをすることや調べて発表というのは割合できるかなとは思いますが、横断的かというと、全教科でとなるとまだハードルが高いと感じます。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

どうしても、国際とか学校間交流となると、英語や言葉の部分で壁が出てきがちかなと思います。私も英語だったのですが、そのあたりの乗り越え方というのは、まだこれからの課題になるというところでしょうか。小寺先生、いかがでしょうか。

○小寺裕之（清心女子高等学校）

SSHなので科学発表等は英語でするようにするため、ネイティブの先生方が全力でそこにパワーを注いでいますので、文系の生徒がこうした発表する機会がなかなかなくて、非常に内部的なバランスが悪いと思っています。ESDによるポスターセッションや活動の発表の場が課題であると思いますので、「ESDに関するユネスコ世界会議」の後、発表の機会があればよいなと思っています。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

「ESDに関するユネスコ世界会議」というのは、ユネスコスクールに入っておられないところもあるのですが、一つの契機になるのではないかと思います。先ほど言いましたように、イベントが生徒のモチベーションを高めるというところがあるのではないかと思います。やはり、そのイベントはうまく有効活用していくことによって生徒にとってもよい成長のチャンスとなることや、先生にとってもよい変容のチャンスになるのではという気がするのと、やはりこれだけされている筑波大

学附属坂戸高校さんでも、これだけのお悩みをお持ちであるといいますか、やはりどこも一緒なのだなというような気持ちもしているのです。時間がかかることというのは、現場の教員もある程度覚悟をしなければやっていけないのがE S Dであり、そこが面白みであるところなのかなという気がしています。その中でも、先ほど少しヒントをいただけたのですけれども、生徒の日常的な活動の中から出てくるような疑問点を大事にし、そこから広げていくということ、それから先生自身も、もちろん先生がすれば簡単なのですけれども、例えば幼稚園の子が電話をかけられるようになるというようなこともあることから、是非外へ出ていき、それから体験をする、自分がするという部分もあると思うのですけれども、させていく中で、先生も何かわくわくするようなというか、楽しいなどといった学びがないと続いていく活動にはならないのかなというふうに感想をもちました。

それから、それぞれの教科の壁というところですが、必ずしもE S Dカレンダーを作ることだけが有効な手段ではないのかもしれないと思っています。今日は、本当に今野先生から貴重な資料をいただきました。筑波大学附属坂戸高校さんが作られた「ユネスコスクール・E S D実践概要図」です。これはE S Dカレンダーを作るまでもなく、それ以上によいものだと今思っているのです。ここではひとつこういったものを作成して教員全員で見取り図というのを、学校全体で、うちの学校はこういうふうにE S Dを核にして、こんなことをしているというのをまとめないと、それこそSSHやSGH、MD Pなどの英語三文字の中に絡め取られていってしまっ、それぞれ生徒にとっても3年間のストーリーがわからなくなってしまうかなと、一体何をやっているのか見えなくなってしまうことがあると思うのです。いや、もう受験のこと、進路を考えること、キャリア教育など何でもつながっていることは、一つのE S Dを核にした学びであるのだというようなことを「見える化」していくことも、とても大事なのではないかと感じています。私はそういうことはまだ取り組んだことはなかったのですけれども、今、もし現役で教員をしていた頃にこういったつくり方を知っていたら、また違ったのかなという感想をもっています。

先生方がいかがでしょうか。まだまだ話し足りないなという感じがしているのですけれども、残り時間が少なくなっていってしまいまして、ここで特にこの場でというのがあればお願いします。

○今野良祐（筑波大学附属坂戸高等学校）

私もE S Dや総合科学科などについて、少しさかのぼって戦後どういうふうな経緯で出てきたのかと、論文でまとめている作業を昨年度仕上げました。何かそういうことを色々調べる中で、環境教育はE S Dを包括するのか、それとも何なのかなどという議論があったりするのですけれども、何かそういうところよりも、我々が高校という現場でどういう教育をするのか、どういう人を育てるのかと

いうところのほうが重要であると考えます。別にコラボレーションしなくても、どういう教育をするのかということが肝心で、それが、結果としてE S Dにつながっていく。80年代の臨教審（臨時教育審議会）がありました。それ以降、多様化や個性化、自分探しの旅など、ゆとりでもそのようなが出てきましたけれども、あまり社会を見させるようなことをしなくなりました。その中で「産業社会と人間」というのでキャリア教育や、社会で生きる、職業を考えるなどというのが出てきたと思うのですが、今うちの学校でも、あまり社会を見ることや、職業を知ることや、そういう活動がなくなって、だから自己理解ばかりの「産業社会と人間」なのですね。そのような中ではやはり持続可能な社会づくりのための課題がなかなか出てこないです。やはり社会の中で生きるということで、では、高校教育をどうするなど、おそらくそうやって突き詰めていくと、目の前の国公立大学、東京大学に合格するといったことだけではないゴールが見えてくるはずなのです。ですから、高校生は発達段階でどういう教育を我々がやっていくかということがむしろ大事なのかなというような、少し結論が見えてきたという感じがしています。E S Dは本当に広い概念であって、そこで我々がどうという人材を育てていくかということが最も大事であるという感想をもっています。

○司会 柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございます。私も本当にどんな教育でも突き詰めていけば、結局E S Dにつながっていくのだという思いを持って研究もしています。岡山大学大学院教育学研究科E S D協働推進室でも本日の皆様の議論をもとに、今後もっとよいプログラムやよりよい研究・実践につなげていき、先生方と一緒に高校教育の改善に微力ながら邁進できればと思っています。私自身としては、色々なヒントが得られた研修会だったなとうれしく思っています。また来年度以降もこうした研修会を開いていこうと考えています。ユネスコスクールのホームページやASPUnivnetの公式ウェブサイトで、ご確認いただければと思います。また、E S D協働推進室のホームページも近日開設予定です。どんどん発信していきたいと思っていますので、よろしければチェックしていただいて、またこういった機会に再びお集まりいただきたいと思っています。まずは11月の「ユネスコスクール世界大会」に向けて頑張りたいと思っていますので、これからもよろしく願います。今日は、本当にありがとうございました。

